
魔法先生ネギま！ ～とある生徒の奮闘記～

ズック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！とある生徒の奮闘記

【Nコード】

N4071N

【作者名】

ズック

【あらすじ】

魔法先生ネギま！の二次創作です。

この作品には主人公最強の設定は含まれていません。

原作ヒロインたちとの絡みは多々あります。

原作にはいなかった男子生徒が、巻き込まれて、奮闘して、頑張るお話。

ブローグ

俺こと神無悠斗は昔から変な物が見えた。

例えば、自然発光する木だとか、その周りを飛ぶ発光体だとか、人から立ち上る湯気のようなものだとか、鎖で雁字搦めにされてても平気で歩いてる金髪少女とか。

……最後のはなんだかおかしな気もするが、とにかくそういうものが見えるのだ。

別に、日常生活の中で困ることはないけれど、俺がもっと小さかった頃にはよく両親を困らせた。

何せ他人が見えないものが見えるのだ。イジメもあった。そして今は――。

「不良少年になってしまったとさ」

「おい、勝手に変なことを言ってるじゃねえっ！」

「不良少年みたいなものだろう？」

9月の終わり、まだ少しだけ暑さが残る昼下がり。

隣にいる10年以上付き合いのある悪友――火之川真――^{マコト}がトレードマークの赤銅色のマフラーを弄りながら言ってくる。

「授業もちゃんと出てるし、誰彼構わず喧嘩吹っかけてるわけでもないだろ」

謂れもなく不良扱いされるのは嫌なので反論しておく。

そんな、ちよつと家に帰るのが遅いだけで。

あと、かっこつけでたまに煙草を吸ったり。……咽^{むせ}るからほとんどしないけど。

あとたまに襲ってくる不良相手に喧嘩したり。

髪の色が不味いんだろうか？

自慢じゃないが、綺麗な銀髪なんだが。

……自慢っていうかナルシストみたいだな。

他にもあつたような、なかったような。

「ユートももう少しトラブルを減らせばモテるだろうに、もったいない」

「残念だが、トラブルが俺に向かって来るんでね」

馬鹿な話をしつつ目的の場所へと向かう。

今日は休日だからこんな時間でも人が多い。

ちよこちよこ視線を向けられながら、それでも歩く。

麻帆^こ良にはスゲー髪の色した人もいるから自分の銀髪もあんまり目立たなくて済む。

「しかしまあ、珍しいね。休日は外に出ないユートが自分から世界樹を見に行くだなんて」

「それに付いて来るお前は相当な物好きだがな」

ついでに言えば世界樹を見に行くのは初めてじゃないし、こいつを連れてくるつもりもなかった。

たまにフラッと寄りたくなって、それが今日で。たまたま会ってしまった。

そして今に至る。

こいつと話し込んでいるが、世界樹はなにせ他にないくらいに大きい。

ヒョイと顔を上げれば麻帆良のどこからでも見えるのではないだろうか。

「ん、到着」

「相も変わらず大きな樹だね」

ふむ。

フラフラと、広場を横切って世界樹の根元へと近寄る。
根に触れる。

世界樹を覆う光がそれに反応したかのように少しだけ増す。

「一体なんなんだか」

この樹がいつも光を放っていたのは物心ついた頃から知っていたけれど、未だに何が理由なのか分からない。

世界樹を見上げる。

思わず吸い込まれそうになる存在感。

俺がどこかこの樹に惹かれるのはなぜなのだろうか。

「なにを考えているのかな、つと」

「いてっ」

横から躊躇^{ためら}いを感じないボディブロー。勿論、じゃれ合い程度の威力だが。

とりあえずお返しに頭に手刀を斜め45度の角度で叩き込む。

「私はテレビか何かかね」

「直らない分テレビより性質^{たち}が悪いがな」

世界樹の根元、影になっている所に座り込む。

暑くもなく寒くもなく丁度いい。

大きな欠伸を1つ。

「なんだ？ ユートは昼寝にでも来たのか？」

「まあ、そんなもんだ。マジで寝るから帰ってもいいぞ？」

「……いや、こんな休日の過ごし方も偶にはいいだろうさ」

そう言つてマコトが俺の隣に同じ様に座る。

まあ、こいつがいいのであれば俺は何も言わないがな。

また、大きな欠伸を1つ。

じゃあ、お休みなさい……。

子供が泣いている。

場所はどこかの公園だろう。砂場と、鉄棒と、滑り台と。簡素な遊び場である。

周りの大人たちは誰も子供に寄ろうとしない。

ヒソヒソと小声で話しながら遠巻きに見ているだけ。

いや、違う。子供を見て笑っているのだ。まるで見世物小屋の道化^{ドクロ}を見るように、嘲り笑っているのだ。

子供は泣いたまま。他にいる子供たちも、大人たちと同じ様に笑うだけ。

永遠に続くかと思われたその光景は、

『どうした。なんで泣いている』

ただ一人の登場によって終わった。

「っ!？」

何やら夢を見ていたようだ。もう殆ど思い出せないけれど。寝ぼけている頭を振って意識を覚醒させて——呆然とした。真っ暗なのだ。人もいない。慌ててポケットから携帯電話を取り出して時間を確認。現実を確認して青ざめる。

「おいっ！ 起きろマコトっ！」

「なんだね……。もう少し優しく起こしてくれないか……？」

小さく呟く姿が小動物のようで、珍しいものが見れたと思ったがすぐさま用件を思い出す。

ああもう、こいつはっ！

「あと少しで日付が変わるくらいの時間なんだよー！」

「……なんだと？」

いきなり人が変わったかのように跳ね起きた。

「私としたことが……、何たる失態だ」

周りの暗さを確認して、携帯を確認して。

先程までの寝ぼけた様子はなく、いつものマコトだった。

「走るぞ、ユート」

「お前は寮だもんなあ」

言い終わる前に走り出しているマコトの後を追いかける。

何でも寮の門限を過ぎたのがバレた場合、寮長さん特製のこの世のものとは思えないような不味さの健康茶を飲まされるらしい。
心底寮じゃなくて良かったと思う。

「む、ここでお別れか」

「おう、じゃあまた明日な！ 死ぬなよ！」

主にお茶で。

マコトが走り去って行くのを見届けて、歩き出す。

時刻はもう12時を回ったが、自分だけなら別に急ぐ理由もない。

こんな時間まで寝過ごしたのは初めてだな。

いつもは陽が落ちる前には起きるのだが、珍しい。

今日は満月。中秋の名月である。

だからといって何をするわけでもないが。

街灯に照らされながら少し肌寒い風を受ける。

流石に秋らしい寒さだ。

「うん？」

何か聞こえた気がする。

周りを見るが誰もいない。

空耳だろうか。

急に一際強く風が吹き、街路樹が音を立てる。

「っ！？」

あまりにも強い風を受けて、反射的に目を瞑った。

時間をそれほど待たず風が止み、目を開ける。

「不味そうな男だが、まあいい」

そよ風になびく鮮やかな長い金髪、物語で魔女が身に着けるような外套と帽子。

そして何よりも目を引くのが――

「悪いが少し血を分けてもらうぞ」

――その身を縛る、数多くの鎖。

プロローグ その2

「はっ、はっ、はっ、……つく！」

走る走る走る。

息も絶え絶えで、今自分がどこにいるのかも分からないがただひたすらに。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ。……ふー、ツゴホ！」

一体どれだけ走ったか分からないが、流石に疲れた。
立ち止まって息を整える。

くそっ、いきなりなんだよ。

「どうした、鬼ごっこはもうお仕舞いか？」

背後から掛かる声に体が一瞬呼吸を忘れる。

振り返らなくても分かる。さっきの女——いや、少女が——だ。
上半身だけ振り向いて確認。

自分の目を疑いたくはないが、何度見直しても同じ結果。

信じられないが確かにその少女は浮いていた。周りに青と黒の発光体を従えながら。

「それ、踊れ！」

少女が声と共に試験管を宙に投げ、腕を振るうと周りの青い発光体が氷の矢となる。

それはそれなりの速度をもって射出され先程まで俺がいた場所を通

過する。

くそっ、完全に遊びじゃねえか！

どうやら少女の機嫌によつて俺は生かされているらしい。

完全にギリギリ避けられるくらいの速度であの矢は制御されているのだろう。

石畳にも突き刺さるあれが生身じぶんの人間を対象としたらだなんて想像したくもない。

「ははっ、しぶといじゃないか。いつまで持つかな？」

「こ、んのっ！」

遊ばれているという現状に腹が立つが、一般人と魔女（仮）。

どちらが優勢なのは火を見るよりも明らかである。

もう何度目になるか分からない少女の的当て。

右前に倒れこむようにしてやり過ごす

「鎖で雁字搦めのくせに、なんでそんな余裕なんだよっ！ 畜生！」

もつと制限とかされてるもんだらう。

……違うか。制限されててこれなのか。世界はこんなにも理不尽だ。

「………なんと言った？」

悪態を吐いた後にピタリと声も矢も止んだので恐る恐る振り返ると少女の顔には先程までの愉悦の表情は無く、何か不思議なものを見るような目でこちらを見ていた。

……ああ、そうか。そうなのか。

俺が見ているものは、魔女（仮）にも見えないようなものなのか。少しだけ落胆している自分に気がついた。

この少女なら自分の見ているものが分かるかも知れないと、どうやら無意識のうちに勝手に思い込んでいたようだ。

「どうもこうも、俺の目にはあんたが鎖で雁字搦めにされて地面に繋がれているように見えるんだよ」

「……呪いの可視化？ そんな限定的な異能が出るか？ もっと広義的な……」

立ち上がって諦め半分、落胆半分で答えを返すと、少女は小さくブツブツと独り言を始めた。
服が砂だらけだ、くそっ。

さて、逃げるなら今のうちか？

少女の愉快的な行動はなりを潜めている。

今ここで逃げ出したとしても少女は気付かないのではなからうか。
音を立てないように慎重に後ずさる。

慎重に……慎重に……。

トン、と背中になにかが当たる。

街路樹にでも当たったかと思っただ、ここは道の真ん中。ぶつかるような物は何も無いはずだ。

じゃあ、今俺が背を預けているのは？

ゆっくりと顔を後ろに向ける。

そこにあっただのは端正な顔と透き通るような緑髪。と、メイド服と
メカミミ……？

「……」

「……（ペコリ）」

お辞儀された。こんばんわー。

「じゃあ、そういうことで」

「そういう訳にはいきません」

そのまま素通りしようとしたら見事に腕をとられて地面に押さえつけられてしまった。

しかも痛くないように加減されて。

く、屈辱……。

一応同年代では喧嘩は勝ち数の方が多い俺だが、ここまであっさり
と組み敷かれたことは1度もない。

無駄だと分かっているが少し力を入れてみる。

ギチリ、と腕が軋む。これ以上やっても自分が痛いだけだな。

「マスター」

「うん？ ああ、そのまま押さえておけ。少しそいつに聞きたいことがある」

マスター
ご主人様だと！？

あれか、百合百合でキャツキャウフフな関係なのか！？

「があっ！？」

「マスター、そんな乱暴にしては……」

「いや、なんとなく変なことを考えてる気がしてな」

少女に思いつきり頭を踏まれた。

下はコンクリだから痛いことこの上ない。

「さて、私の質問に答えてもらおうか」

「……なんだよ」

どうせお願いじゃなくて命令だろう。

こっちは身動きも取れないし素直になつておこうじゃないか。

「まず1つ目。他人には見えないものが見えるんだな？」

「ああ」

これは質問というよりも確認だろう。

少女に見えない鎖が見えている。

それを少女に言ったのは自分なのだから俺が嘘を言っていない限りは事実のことである。

「2つ目。私の鎖以外になにを見たことがある？」

「……初めて見たのは、世界樹だ。あの樹はいつも光っている。他には発光体だとか、幽霊っぽいのか」

何が少女の興味を引いているかは分からない。

だが自分のコレをまともに聞いてくれたのはこの少女が2人目である。

俺の答えに反応してやはり少女は考え込む。

俺のコレはそんなにおかしなことなのだろうか？

今までそんなに気にせず生きてきたが、少し不安になってくる。

「最後だ。お前の名前を教えろ」

「……は？」

目の前の少女が何を言っているのか理解できなかった。
おそらく相当間抜けな顔だったんだろう。少女は不快だという感情を隠そうともせずもう一度俺に声をかける。

「貴様の名前だ。まさか無いわけじゃあるまい」

「……神無悠斗だ」

「神、無？ ……そうか、ククク。あの神無がこんな異能持ちを飼っているのか。皮肉以外のなにものでもないな」

笑い出す少女。

うちの家系のことを知っているようなこの少女はいったい何なんですか。

というかこんな不審者に知られているほどうちは有名なのか？

「さて、私に聞きたいこともあるだろう。だが、さよならだ」

頭の中が整理できないうちに少女が囁く。

少女が組み敷かれている俺の目の前に指を突きつけ、その指に光を灯す。

「うぁ……？」

パン、と目の前で光が弾けて視界と思考を染めていく。

なにも考えられない。目の前の少女が笑う。

緑髪の少女が金髪の少女に何か言っている。

……なんでこんなことになってるんだっけ？
ああ、くそ。わから、ね、え……。

気絶して大人しくなった男を見る。
記憶消去の掛かりが少し悪かったことを考えると無意識にでも障壁が展開されていたんだろう。
つくづく面白い男だ。

「マスター、この方はどうしますか？」

「捨てておけ。問題無い」

しかし神無か。あの家系は少し前に終わったと思っていたが。
笑うのを止められない。
じじいに色々と吹き込んでやろう。
その後こいつがどうするかは知ったことではない。
気分が高揚したまま宙へと浮かぶ。
最後にもう一度だけ男——神無悠斗——を見下ろす。

「ふん。神はいないと周りから見放された人間がどこまで足掻くか
見ものだな」

茶々丸を後ろに従えて飛ぶ。
せいぜい私を楽しませてくれよ？ 神無悠斗。

「……あ、血吸うの忘れた」

「ナニヤッテンダカ」

どこかのコテージでそんな会話があつたとか、なかつたとか。

1時間目 とある生徒は前途多難？

「うう、……ん」

チチチチ、と鳥の囀^{なみず}りが聞こえる。

近くでパタパタと控えめに、しかし駆け回るような足音。

あー、朝、か……。

いつもの朝の風景がそこにあるんだろう。

眠気と布団の誘惑をどうにかこうにか振り払い、体を起こす。

「あ、おはよう。ゆーと」

「……ああ、おはよう。母さん」

目の前には黒髪の若々しい女性。俺の母である神無悠華だ。

というかパツと見、中学生かと聞きたくなるような外見である。

その母がなんで俺の部屋にいるか、などとは思わない。

朝起きていなかった日の方が少ないくらいなのだ。もう慣れた。

ただ、困るのが俺を起こすわけでもなく部屋にいるのだ。

「あー、今何時？」

「7時ー」

仕方ない、起きるか。

ベッドから抜け出して、ふと違和感を感じた。

昨日の、帰宅するまでの記憶が曖昧だ。

寝巻き代わりのジャージを着た覚えもないし、そもそもどうやって帰ってきた？

……風呂入ったっけ？
さっぱり分からね。

「どうしたの？」

「……いや、なんでもない。シャワー浴びるわ」

着替えを持って部屋を出る。

考えれば考えるほど分からない。

昨日は世界樹を見に行つて、真に捕まって、昼寝して、寝過ぐして、それから……？

首を捻つて思い出そうとしてももやが掛かっているように、とかそこだけ抜け落ちているかのように思い出せない。

「まあ、いいか」

そんなこともあるだろう。

シャワーを浴びて軽く洗つて出る。

さてさて急がないと遅刻か？

「そついえばお父さん今日遅くなるんだって」

「ふーん、珍しいな」

何の仕事をしているのかも知らないけれど、いつも定時で帰ってくる父親が遅くなるとは。

「だ、だからね。今日は少し早めに帰ってきて欲しいな……？」

「……分かったよ」

うちの母はどうにも暗いところや夜に1人でいるのが苦手なようで、父親がいないときはこうして俺に助けを求める。

別に俺も父や母が嫌いなわけではないので渋々従う。

まあ、別に予定は無かったからいいんだが。

「じゃ、行ってくる」

「……気を付けてね」

背中にかけられた言葉に対して適当に手を振って走り出す。

げ、いつもの電車に乗り遅れる。

朝から汗だくになりたくないんだが、仕方がない。

全力ダッシュ！

そういえば、いつもと声のトーンが違ったような気がしたけど……
気のせいかな。

間に合わなかった……。

目の前で行ってしまったギューギュウ詰めの電車を見送る。

汗までかいて走ったつてのに意味ないわな。

備え付けのベンチに座ってちと休憩。

広すぎるんだよチクショー……。

「……なんだかなあ」

昨日から踏んだり蹴ったりな気がする。

……ん？

昨日から？

待て待て待て、何か引つかかったぞ。

俺は昨日なにか面倒ごとに巻き込まれたのか？

しかし今朝と変わらず、もやがかかったように思い出せない。

あー、もう気持ち悪いなっ！

がしがしと頭を掻き篁る。

止めだ止め。こういう時はさっぱり忘れて、あとから突然思い出す
だろ。

……そんなことを思っても気になってしまっただけれど。
空を見上げる。今日も穏やかないい天気である。

ああ、そういえばあのバカは無事に罰ゲームを回避できたのだろうか？

「ふむ、可笑しな顔をしているな」

横から声をかけられた。

ああ、この声は――

「お前の安否を気にしていただけさ」

赤銅色のマフラーをした自分の悪友だった。

なんだこいつも寝坊か？

「ユートと一緒にしないでくれ。私はいつもこの時間だ」

へえ、どうりで朝同じ電車にいなかった訳だ。

ん？ 俺がいつも乗っている電車の次はかなり走らないと教室に間に合わないはずなんだが。

「それでも体力には自信があるんでね」

全く、これっぽっちもそんな感じがしないんだが。
薄く笑みを浮かべている真を見て思った。

「まあ、そんなことはどうでもいい。昨日は悠華さんに泣かれなかったか？」

——思考が止まる。

それがあつたとしても俺は覚えていない。

「どうした？」

「んー、なんか昨日のお前別れてからの記憶が無いんだよ」

「……その話、少し詳しく聞かせてくれ」

スツと目を細めるマコト。

その様子も気になるがこっちとしては詳しくと言われても、みたいな状態である。

詳しく、詳しく……？

「まあ言つたとおりにお前と別れてからの記憶がもやがかかっているというか、すっぽり抜け落ちているというか」

「もやがかかると抜け落ちるでは大分差があると思うのだが……」

そう言つて黙り込んでしまった。

確かにそうだけど、そんな感じなんだからしょうがない。

さて、俺は何か不味いことでも言つただろうか。

いやまあ、いきなりプチ記憶喪失なんだぜって言われたら俺も黙る

わ。

「しかしいきなりそこだけ記憶が無くなるだなんて、まるで魔法でもかけられたみたいだな」

「……ま、ほう？」

引っかった。

普段の俺ならそんなもの現実には無いと即座に言い返している。

だが、今回は何かが引っかった。

断片的な情報が浮かび上がる。

金髪の少女とその従者。

氷の矢。

神無の名について。

雑音^{ノイズ}が走る――

痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
――！

「――！？」

マコトが何か叫んでいる。

耳には入るが理解できない。

頭が割れるように痛い。

視界は赤く染まり、四肢の感覚も無い。

――失敗か。

白衣を着た男性が溜息を吐く。
視線の先にいるのは……子供？

――仕方ない。も一度始からだ。

――そでは体が……

――構わ。彼らはれの安否ど気にてない。

^{ノイズ}雑音が走って聞こえにくいが、どうやら彼らは子供がどうなるかと関係ないようだ。

――しか……

――今倫理や徳を語のか？

――れに、俺ちは依頼やつるん。頭かしいは依
者の方うよ。

――無話はそま。こより被体の力増おび適正属
増手術う。

――……了、した。

そして、悲鳴が走った。

「おい、ユート！」

ハッと意識を戻すと、いつも薄く笑みを浮かべているマコトが凄
形相で目の前にいた。

白衣の男たちも、悲鳴をあげる子供もいない。
背中にじつとりとした感覚がある。

走ってきた後よりも不快感が増している。

「突然頭を抱えて唸りだしたから何事かと思っただが……。大丈夫か？」

マコトが柄にも無く顔を覗き込んで言ってくる。
本気で心配してくれているんだろう。
いい友人を持ったものだ。

「ああ、もう大丈夫だ。心配かけたな」

まだ少し違和感があるが、支障はない程度だ。
しかし、なんでいきなりあんなものが見えたんだか。

「魔法というのがキーワードだったのかもな」

金髪少女と魔法。

それと白衣の男たち。

なんだか厄介ごとのような気がするな……。
平穏無事に生きていたいんだが。

「さて、そんなことよりまずは授業だ」

生徒たちを詰め込んだ電車がやって来る。
電車内で汗かいて、さらに走らなきゃいけないんだよな。めんどく
せえ。

マコトと一緒に乗り込んで、決意を1つ。
とりあえず、あの金髪のガキに会ったら1発殴ろう。

——学園長室。

そこは広大な麻帆良学園を管理、維持などをしている近衛近衛門がいる部屋である。

厳かな雰囲気に含まれているそこで近衛門は前日に起きた魔法反応の調査レポートを眺めていた。

唐突に、扉が開かれる。

「ジジイちよいと面白い話があるんだが、聞くか？　　というか聞け」

「なんじゃ藪から棒に」

入ってきたのは金髪の少女とそれに付き従う長身で緑髪の従者。

エヴァンジェリンと茶々丸である。

エヴァンジェリンはまるで部屋の主が自分であると言わんばかりに来客用のソファーに座り、茶々丸は当然のように後ろに立つ。

「神無の息子。あれはバケモノだ」

「……ほう？」

近衛門が興味を示す。

彼とて神無の名は知っている。

と、いうよりも神無の名は有名なのである。悪い意味で。

「ああ、別に種族的な意味じゃないぞ？　　そういう意味ではただの人間だ」

「では、どういうことじゃ？」

目の前にいる少女——実際は600年を生きる吸血鬼なのだが——

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに問う。

多くのものに知られてはいないが、この世界には鬼や妖怪、目の前の少女のような吸血鬼がいて、麻帆良にも亜人は多くはないがいるし、近衛門はそれに関わっているのだ。

種族的な問題であるならば、少なくとも自分は気にしないと彼は思っている。

だが、エヴァンジェリンは違ふと。種族的な問題ではなく人間離れ、いや、バケモノと呼べるほどの何かを神無の息子に見出したのだらう。

「奴はな――」

コンコンコンコン。

エヴァンジェリンの言葉を遮るように、しかし控えめに扉を叩く音。

「開いておるよ」

「失礼します」

入ってきたのは黒髪で中肉中背、10人に聞けば10人に特徴が無いのが特徴と言われるであろう男。

「おお、神無君か。どうかしたかね？」

その男こそ、今彼らが話題にしている人物に一番近しい者だった。

神無秋斗。かつて栄光を欲しいままにしてきた神成家の現頭首。

今はかつての栄光の欠片も見えないが、と近衛門は続ける。

「いえ、どうにもうちの息子が変わったもので。魔法関係で何かあったんじゃないかと思ひまして」

近衛門と秋斗は2人してエヴァンジェリンを見る。

近衛門は、また何かやったのかという目で。秋斗はお前がやったんだろうという目で。

それに対してエヴァンジェリンは――

「はっ。自分の子を改造した男にそんな目で見られる筋合いはないな」

嗤^{わら}った。

お前がそんなことを言う権利は無いと。

「それ、は」

「エヴァンジェリンよ、どういうことじゃ？」

言葉に詰まる秋斗の様子を見て近衛門は更に詳しく聞きだす。

「そのままの意味さ。眼と魔力容量と。ああ、触覚もか。どれも神無^{そいつ}秋斗にはないものだろう？」

「神無君、本当かね？」

「……」

秋斗は答えない。

しかしそれが事実であると如実に表していた。

「奴を使えば神成に戻ることも出来るだろうに。あんな外道な処置を施すくらいだ。今更躊躇^{ためら}うこともあるまい」

「私はっ！……息子を道具として扱うつもりは、ない」

どんどん小さくなっていく声。

その言葉に込められたものは本物なのだろうが負い目が彼を攻め立てる。

「それよりも、うちの息子に手を出したのは貴様か？
ダーク・エヴァンジェル 闇の福音」

「ん？ ああ、そうさ。夜中に1人でふらついている不審者がいたものでな」

大嘘吐きである。

実際は不審者だとか関係なく血を吸いに獲物を探して、それがたまに悠斗であっただけ。

近衛門も本当か嘘か計り知れていないので口を出さない。

「今回は眼を瞑る。だが、次があつた場合は、例え貴様が最強の魔法使いであろうと——殺す」

ありつたけの殺意を込めて秋斗は宣言する。

それを見てもエヴァンジェリンは嗤う。男の矛盾を、滑稽さを。

「くくくつ。いいな。お前のような奴は久しく見ていなかった。ま、1つだけ言っておこう」

「……なんだ」

「周りや本人の意思も関係なく、遅かれ早かれ奴は巻き込まれるだろうよ。異能というのはそういうものだ」

エヴァンジェリンは従者——茶々丸に声をかけて秋斗の隣を素通りし、茶々丸も主人の後を追う。

秋斗は動かない。

分かつているのだ。自分では彼女に勝てないことを。あきと

それでも啖呵を切るしかない。彼が息子を大事にしているのもまた事実なのだから。

静かな音を立てて扉が閉まる。

エヴァンジェリンと茶々丸は退室した。

「さて、神無君。色々あるだろうがまずは君の話聞かせてくれんかのう？」

「……はい。あの子、悠斗は——」

2 時間目 とある生徒と優しい人形

さて、麻帆良学園は小学校までは男女共学だが、中学以降は男女別のエリアに分かれている。

ようするに男子校、女子校のように分けられるということである。

「そんなわけでむさ苦しい」

「ひでえ！」

「つーか俺らも同じだって」

潤いが足りんよ。

クラスメイトの中村と豪徳寺が吼える。

豪徳寺、ガムくれ。

長ランにリーゼントという時代錯誤な格好をした豪徳寺からガムを受け取る。

見た目はアレだが良い奴である。

「男子校なんだ、仕方ない」

「そうだぜー？」

大豪院と山下が続ける。

だが山下、てめえは駄目だ。

ファンクラブなんぞがある貴様は俺たちに詫びやがれ。

「ふむ、ユートよ。葛葉女史くすのはがいるではないか」

「いや、なんかそれは違うだろ」

葛葉刀子。

麻帆良学園の教師の1人で容姿も良く男子生徒のファンも多くいるのだが、一度離婚したらしく本人はそのことをひどく気にしている様子。

現在彼氏がいるとかいないとか。

まあ、それは置いといて。

マコトに言われたが、違うんだ。

そういうことじゃなくて、もっとこう、健全な付き合いがしたいんだよ！

「いや、なんつーか悠斗は近寄りがたいから……」

「まじで!?!」

衝撃の事実発覚だよ！

女の子と触れ合う機会もないから全く分からなかったし！

「銀髪だし、目つき悪く見えるし、ちょこちょこ喧嘩してるし、トラブル体質だし」

「これじゃあ女どころか誰も近寄ってこなごふあ!」

余計なことを言った中村に鉄拳制裁。

口は災いの元である。

「なあ。魔法つてあると思うか？」

「ふむ、あってもおかしくはないだろうね」

何事もなく学校も終わりマコトとの帰り道、ふと気になったことを聞いてみた。

マコトの答えは酷く簡素なもので、どちらでもいいと言わんばかりだ。

「そうか……」

「どうした？ 今朝言っただことでも考えているのか？」

「まあ、そんなところだ」

記憶が戻ってきた気分になってしまっているのだ。

それでもやはり戻ってない部分もあるのだが。

朝に”抜け落ちている”と思った部分はきっと俺の頭から完璧に消されてしまっているのだろう。

「……ユートは、もし魔法が使えたとして何がしたい？」

突然聞いてきた。

マコトはこういう話にはあまり食いつかないと思っていたんだが、そうでもなかったらしい。

魔法が使えたら、ねえ。

あの金髪少女が使ったのは他人を殺傷するためのもんだからなあ。あー、1個平和的なのがあったか。

「あれだ、朝の満員電車乗らなくて済むように飛んでみたい」

マコトはキョトンとした後に小さく笑い始めた。

「ユートらしい答えだ」

褒めてんのか、それ？

「ああ、褒めてるさ。実に君らしい、私が予想もしてなかった答えだったよ」

「……ちなみに、予想してた答えってのは？」

「うん？ それは秘密だ」

くつくつと笑いながら先を行ってしまった。
さて。今日の真はなんだかよく分からんぞ？
一瞬しか見えなかったけど、横顔に映っていたのは、安堵——？

「なあ、マコト……？」

「さて、今日は少し用事があるからここでお別れだな」

いつも別れる場所よりも手前で真が言う。

俺としてはさっきの表情の意味を知りたかったんだが、用事があるなら仕方ない。

自分も母に早く帰って来いと言われていた手前、付いて行って真相を確かめるといふのも憚^{はば}られる。

「しゃーないか。じゃあまた明日」

「うん、すまないな。また明日、だ」

昨夜と同じ様に、マコトを見送ってから歩き出す。
もしも魔法が使えたら、ね。

マコトに問われたことを思い出す。

魔法が使えたとしても使い道が思い当たらないな。

「ん？」

見覚えのある後姿が見えた。

あれは茶々丸さん、だったか。

見ていると重い荷物を持っているおばあさんを手伝ったり、木に登って降りられなくなつた猫を助けたりして、子供からお年寄りまで様々な人たちに感謝されている。

「……いい人なんだな」

茶々丸さんが大通りからひとつ裏の路地に入っていったのを見て追いかける。

広場に出て足を止める。

足元にいるのは……。

「猫？」

1匹2匹出てきたと思ったらつられる様にたくさん出てきた。
猫にまで好かれるとは……。

いやはや、俺とは大違いだね。

「何か御用でしょうか」

声をかけられた。

目の前にいる緑髪の少女の目には感情がないように見える。さて、御用と言われても特に何があるわけでもない。

考えて——面倒になった。

「じゃあ君のご主人様についてちょっと聞きたいんだけど」

「——覚えているのですか」

一瞬息を呑んだように見えた少女は、しかし淡々と言葉を続ける。

「んにゃ、思い出した。欠落してるところもあるけど」

「そうですか。あの時は申し訳ありませんでした」

「え？ ああ、こちらこそ……？」

なんで2人で頭を下げあつてんだ……？

「で、聞きたいんだが」

「私の答えられる範囲でならお答えします」

「君のご主人様は——、あれは、魔法使い、ってことでいいのか？」

「はい。様々な呼び名はありますが、その認識で構わないと思います」

「俺が襲われたのは偶然だよな？」

「はい。マスターは気分屋なので」

「俺がちゃんと家に帰ったのも魔法で？」

「はい。出来る限り自然な形で」

「君のご主人様は魔法で拘束とかされているのか？」

「はい。詳しいことは言えませんが呪いだそうです」

「……普通そういうこと言っちゃ駄目じゃね？」

「……そうなのですか？」

小首を傾げる姿は可愛らしいが、ご主人様的にはどんなに可愛らしくても駄目だろう。

「んじゃあ、最後。君のご主人様と話してみたいんだけど、取り合ってくれないかな？」

「——恐れないのですか？」

「見た目少女だし！」

「……」

沈黙が痛いね、まいったな！

「マスターに聞いてみますが、どうなるかは分かりません」

「試してみてもらえるだけでも十分さ」

おずおずと口を開いて出てきた言葉はどっちとも取れない言葉だったが、とりあえず掛け合ってはくれるだろう。

「それでは、また今度」

「ああ、また今度——いや、ちよいとお嬢さん。名前を教えてはくれんかね？」

「——名前、ですか？」

「毎回君、とかじゃ呼びにくいんでね」

まあ知っているのだけれど、自己紹介もしてない相手にいきなり名前を呼ばれるのは誰しも抵抗があるだろう。

「……絡繰茶々丸です」

「俺は神無悠斗。よろしく、絡繰さん」

軽く手を振って別れる。

「……神無、悠斗さん」

1人残った少女の呟きは聞こえなかった。

3 時間目 とある生徒と吸血鬼

昨日、悠斗は茶々丸と別れた後は特に何事も無く帰宅し、就寝した。帰宅してから彼の母、悠華と一悶着あったというのは割愛しておこう。言わぬが華というものだ。

そして、朝。いつも通りの電車に乗って、学校で馬鹿をやって、終わって、帰る途中。いつもと違う光景。

「神無さん」

「お？ ああ、絡繰さん。こんにちは」

真と一緒に帰宅途中だった悠斗に声をかける少女がいた。エヴァンジェリンの従者、絡繰茶々丸である。

彼女も学校帰りのようで麻帆良の指定学生服を着ている。

「ふむ、ユートよ。お前が女子に話しかけられるだなんて珍しいじゃないか。明日は槍が降るかな？」

「そこまでひどくねえよ！？」

と、いつも通りの漫才を始めるのだが茶々丸にはこのやり取りは分からないので首を傾げるばかりである。

「マスターが、会つのであれば貴様が来いと言っておけ、と言っていたのでお迎えに」

「ああ、了解。悪い、マコト。用事出来たわ」

「ふむ、それは構わないが……」

真は訝^{いぶか}しげに相方と迎えに来た少女を交互に見る。

悠斗の友人関係を思えばどう考えてもおかしいと感じる。

というのも、悠斗の容姿はそれこそ人よりも良い方ではあるが、銀髪と普段の目つきの悪さも相まって初見の人はまず寄ってこない。

悠斗と真は特に用事がない限り1日の大体の間一緒にいる。

このような少女が悠斗と会っていれば気付かない筈がないのだが……。

「まあいい」

そこで思考を打ち切った。

真は悠斗の友人ではあるが保護者面をするつもりはない。

友人関係に口を出すのは野暮なことである。

「とりあえず性犯罪は駄目だぞ？」

「お前が俺のことをどう思っているのか、一度拳で語り合つか？」

勿論本気ではないが。

というか悠斗が本気なら有無を言わず殴りかかっている。

「まあなんだか分からんが変なことはしないでくれよ？」

「しねえつつの!？」

真は悠斗の肩を軽く叩いて別れ、悠斗は茶々丸の横を歩く。

「仲が宜しいですね」

「小さいときから一緒だったからお互い遠慮が無くなってるのさ」

悠斗と真はもう10年以上の付き合いだ。

自分たちの間に変に遠慮があるほうがおかしいと、少なくとも悠斗はそう思っている。

「私にはよく分かりません」

「あんなのがいれば嫌でも分かるようになる」

そう言っただけで悠斗が茶々丸には理解できない。

言葉の上では憎まれ口を叩いているのになぜ笑うのだろうか、と。

それが理解できないのは自分が機械だからだろうか。

しかし自分の横にいる男性は分かるというし、と思考がループ。

——彼女は科学と魔法の技術の結晶である。

それ故にプログラム以上のことは出来ないし、感情というものも備わっていない。

いくら人に似せて創られているとはいえ、人にはなれない。

そして、茶々丸はそれをエラーとしてカットした。

「こちらがマスターの家です」

森に入って少しの開けた所にログハウスが建っている。

おおよそ吸血鬼が住んでいるとは思えない綺麗な空間である。

「お邪魔しますっ」と

「よく来たな、神無悠斗。歓迎するぞ？」

「歓迎シテヤルカラ斬ラセロヨ」

茶々丸がドアを開け、悠斗が入るとエヴァンジェリンともう1人——1体と表現したほうがいいか——小さな人形が歓迎の言葉を上げる。

家の中はぬいぐるみや人形がテーブル、ソファ、棚の上にと所狭しと置かれており、明るいうちはいいが、暗くなったら動きだしそんな様相である。

「そりゃどうも。……そっちのちっこいのは？」

「私の姉の——」

「チャチャゼロダ。ヨロシクナ」

そう言つて、ケケケと笑うチャチャゼロは悠斗の眼には特に異様には見えなかった。

というのも悠斗の眼にはチャチャゼロの体に僅かながらも光が見えている。

これが魔力なのだと当たりをつけた悠斗はこういうことも出来るのか、程度にしか思わなかった。

「さて、用件を聞こうか。まさか茶を呑みに来たわけではあるまい」

エヴァンジェリンはぬいぐるみに占領されているソファに座り脚を組み、茶々丸はその腕にチャチャゼロを抱えて後ろに控える。

その正面のソファに悠斗は座り、エヴァンジェリンと対峙する。

「リベンジだ。俺が勝つたら知ってることを話してもらつ」

「私が勝つたら？」

エヴァンジェリンの賭け金は情報。
ならば悠斗は？

「……ちよいと失礼」

悠斗はエヴァンジェリンの足元に屈み、何もない場所で、まるで打ちつけられた杭を引き抜くように手を動かす。
エヴァンジェリンの魔力が少しだけ溢れ出す。
とある呪いで封印されているはずの魔力が、だ。

「つな、貴様っ！ 何をした！？」

流石にエヴァンジェリンも驚いた。

なにせ自分が10年以上どうやっても緩めることすら出来なかった呪いを、目の前の男が苦もなくやってのけたのだから。

悠斗が手を戻すとエヴァンジェリンの封印が元通りに機能する。

「これを、俺が出来る範囲内ではずす。対価にならんかね？」

「……いいだろう。ついてこい、ここでは少し狭すぎる」

エヴァンジェリンを先頭に、チャチャゼロを抱えた茶々丸と悠斗がついていく。

地下へと降りる階段を降り、数多くの人形が並ぶ通路を進む。

通路の奥、両開きの扉を開けるとそれはあった。

直径が身長半分近くありそうな丸瓶の中に大きな白亜の塔と細い塔が建っている。

「これに触れる」

エヴァンジェリンに言われたとおりに悠斗は目の前にある瓶に触れる。

カチリ、と何かスイッチを押したような音が鳴り、悠斗たちは地下室から姿を消した。

「おおう、どこだここは。つーか高え」

悠斗の視界に広がるのは青空と先ほど見たミニチュアに建っていた大きな塔だった。

彼らがいる細い塔、足元には五芒星の魔法陣が描かれており、それがゲートの役目をするのが悠斗にも分かった。

「私の別荘だ。魔法で出来た、な」

ふわり、と浮き出すエヴァンジェリンと、茶々丸の腕から抜け出して自力で歩くチャチャゼロ。

彼女はこの空間の中でなら魔法が使えるようになる。

彼女の体では必然的に歩幅も小さくなるので歩くよりも飛んだほうが楽なのだろう。

チャチャゼロは十分な魔力がなければ指一本動かせないのだが、ここ、エヴァンジェリンの別荘には外よりも魔力が多く存在するため一通りのことが出来る。

魔法陣がある塔と白亜の塔は手摺りのない細い橋で結ばれている。白亜の塔の縁は柱で囲まれ、中央にはオベリスクと呼ばれるモニュメントが聳え立っている。

「さて、前回の続きでもするか？」

白亜の塔の広場、通称闘技場で悠斗とエヴァンジェリンは対峙する。

「時間制限は設けてくれ。逃げ切れたら俺の勝ち。負けはー、動けなくなったらでいいか？」

「いいだろう。時間は10分だ」

10分。短いようで長い。

10分間、悠斗はエヴァンジェリンが作り出す弾幕から逃げ続けなければいけない。

遮蔽物はオベリスクと縁にある柱だけ。

しかし縁の柱は悠斗の脚では遠すぎるために使えない。
実質オベリスクだけである。

「では、私が時間を」

「ケケケ、5分クライハ持タセロヨ？」

茶々丸とチャチャゼロが邪魔にならないように離れる。

「それでは、始めてください」

長い10分が始まる。

「まずは小手調べだ。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 氷

の精霊 11頭 集い来りて 敵を切り裂け！」

さてさて、エヴァンジェリンは小手調べという宣言通りわざわざこちらに分かるように呪文を唱えてくれている。

何語だかさっぱり分からんけどな！

どんな魔法にせよ距離を取るのは恐らく悪手。

魔法の射出口も青い光で分かっている。

なら俺が取るべき行動は――

「ぶん殴れるくらいに近づくこと！」

『魔法の射手！ 連弾・氷の11矢！』

ドン、という射出音と共に氷の槍が一齐に打ち出される。その数、11。

そのうち体に当たりそうなのは7つ！

僅かな隙間を縫う様に走り抜け、エヴァンジェリンの目前へと躍り出る。

右腕を引いて半身になり、踏み込みと同時に上半身を回転、掌を突き出す！

「ふふふ、やるじゃないか。てつきり逃げ惑うだけかと思っていたんだがな」

「何分負けず嫌いなもんでね」

掌はエヴァンジェリンの直前で光の壁に阻まれている。

この野郎、表情一つ変えないってことは分かってやがったな。

「ああ、言い忘れていたが――」

「っ!？」

腹に衝撃。

痛みで世界が止まる。

次いで全身に衝撃。2 転 3 転と地面を転がる。

「っ、あがつ……!」

「ここでなら筋力の強化も出来るんだ。迂闊に近寄ると手痛い反撃を喰らうかも知れんぞ?」

身をもって知ったわ、クソが!

どう少なく見積もってもそこの大人よりも強い一撃だったわ!

痛みのせいで呼吸もまともに出来ない。

内臓は大丈夫だろうが、もう1発綺麗に入れられたら確実に腹の中
のものが口から出るな。

「そら、早く起き上がらないと次が来るぞ? リク・ラク・ラ・ラ
ツク・ライラック……」

「っ、のやる!」

引き攣る体を抑えつけて立ち上がる。

随分吹っ飛ばされてるじゃねーか。

魔法ってのはなんでもありだな。

『魔法の射手! 連弾・氷の17矢!』

「このっ」

弧を描くように飛ぶ氷の槍。

エヴァンジェリンを注視しながら横へと走る。

氷の槍は着弾せずに90度曲がつて尚も追いかけてくる。

自動追尾か、それとも彼女が動かしているのか。

どちらにせよ撃ち落とすか追尾を振り切るほどの急転換をしないとどこまでも追ってきそうだ。

エヴァンジェリンは――、動いていない。

180度反転。迫り来る氷に向き合う。

「せつ！」

正面から来る氷を体をずらして横腹を叩く。

僅かに逸れるだけだが、それで十分。

――3つ、4つ、5つ、6つ！

脚は止めずに忙しく^{せわ}地面を擦って、ただひたすらに迫る脅威を打ち払う。

――15、16、17！

これでさっき出した分は終わりの筈。

エヴァンジェリンへ向かおうと脚を進めようとして――

「来れ氷精 爆ぜよ風精」

自分の目の前で輝きを増す青い光を見て、無理矢理横へと飛んだ。

『氷爆！』

爆発音と衝撃。

とにかく頭を打たないようにとしっかり腕で守る。

「冷たっ！ あと痛え！」

首と後ろ髪、この調子なら背中にも霜が付いているだろう。
まともに当たれば氷漬けのバラバラ死体の出来上がりってところか。
多分、今のは指定した空間に氷の爆弾を発生させる魔法。

有効射程は分からないけれど、そこまで遠くまでは撃てないはず。
それと同時に、至近距離の相手にも使わないだろう。

自分の魔法を自分で防ぐのは、効率が悪すぎる。

「これも見えるのか。便利な眼だな」

「感謝したことはそれほどこないけどなっ！」

改めてエヴァンジェリンへと走る。

しかしこともあるうに彼女は地面へと降り立ち、余裕の表情を浮かべている。

迎え撃つ気かよ。

確実に挑発行為だろうが、構わん。乗ってやる。
早く速く。

左を2回、牽制として打ち込む。避けられる。

強めに右を打つ。

やんわりと手を添えられた。

まずい、合気道か！

「こ、んのおお！」

咄嗟に突き出した手を開いて襟を掴みもう片方の手で腕を取る。
体を反転、相手の脚を掛けて投げ飛ばす！

「魔法使いだろうが、体重は変えられねえだろ」

「なるほど。確かにそうだな。だがなぜ固めなかった？　もしかすると時間いっぱい押さえつけることが出来たかも知れんぞ？」

体を浮かせて叩きつけられるのを回避したエヴァンジェリンはおかしなことを言っていた。

「誰があんな馬鹿力と密着するかっての。確実に返されて固められて終わりだろうが」

合気道は投げや固め技が豊富だったはず。まともにやったらすぐに組み伏されるだろう。

さて、こうなるとやれることが途端に少なくなる。

そもそもこの接近戦は時間を使わせるためにやっていることだが、力も勝てない、取っ組み合いも無理となると近づいたら負けな状態である。

だが、後ろに引けば魔法が飛んでくる。

八方ふさがりだろうか。

「諦めたか？　楽でいいが……。些いひちかつまらん。逃げ惑え」

低い音を立てながら生み出される黒い槍。

んにやる。やっぱり何も言わないでも魔法は使えるのか。

黒い槍が射出される。

「諦めねーよ！　どうやってあんたを引っ叩こうか考えてたところだ！」

「それは良い。もう少し私を楽しませてくれよ？　来たれ氷精　大気に満ちよ……」

打ち出された槍が氷じゃないから迂闊に打ち払えずただひたすら逃げる。

それをしり目に背筋が寒くなるような笑みを浮かべて新しく呪文を唱えるエヴァンジェリン。

おお怖い怖い。

もう少し優しくして欲しい――

「ねっ、と！」

迫る魔法に対してすれ違う様に転がって避ける。

危ねー、ちよっと掠ったぞ。

次は――！？

『凍る大地！』

地面から氷の棘がエヴァンジェリンから俺へと道を作るように一直線に生える。

まずい、と思う暇もなく氷に吞まれた。

……赤い、光？

「ふん。所詮は素人か」

「アンマリ面白クモナカタナ」

エヴァンジェリンは落胆していた。

サウザンドマスターに呪いを掛けられて14年。

周りには子供ばかり、闇の福音として怖れられた魔法使いとしての力も使えない。

そんな中でようやく遊び相手が来たというのに、この様。言葉を出す気にもなれない。

「あ……」

しかし勝ちも勝ち、と氷柱の中で眠るようにしている悠斗を出そうとした時、隣にいた茶々丸が小さな声を上げた。

「どうした？ 茶々丸」

「氷柱内の熱量上昇！ これは……っ！？」

「魔力の暴走か……！？ いや、それにしては……？」

魔力の暴走。潜在的な魔力が何らかのきっかけで溢れ出すこと。

主に当人では扱いきれないような膨大な魔力を持っている者が起こしやすい症状ではあるが……。

1本、2本と氷に罅^{ひび}が入る。

エヴァンジェリンたちも身構える。

そして甲高い音を立てて、氷が割れた。

「熱あつ！？ どうなってるんだよ！？」

「……」

なんとも言えないような顔をして自分の魔法から逃れた男を見るエ

ヴァンジェリン。

そもそも魔力の暴走をしていたのであれば、敵である自分に真つ先に襲い掛かってくるはずである。

それがない、ということは暴走をしていないということになるのだが……。

「捕縛系の魔法ではないとはいえ、素人の魔法で破られるなど……」

呪いが掛けられていようがエヴァンジェリンの技量がなくなるわけではない。

それこそ、魔力の暴走で力任せに壊されない限り素人に成す術などないはず。

「うし、まだ続行でいいよな？」

「……ああ。まだ10分も経っていないし、貴様も動けなくなっていないからな」

成す術など、ないはずなのだが。

「茶々丸。残り時間は？」

「4分と38秒です」

時間は半分を切っていた。

エヴァンジェリンは決断する。

「神無悠斗」

「ん？　なんか用か？」

「1発だ。私は今から1発だけ魔法を撃つ。耐えることが出来たら貴様の勝ちでいい」

悠斗からすれば破格の要求にも聞こえる。実際はそんなことはないのだが。

エヴァンジェリンはどんな魔法を使うとは言っていない。

「どんな風の吹き回しかは知らんがね。いいぜ、乗ってやる」

悠斗のその言葉を聞き、エヴァンジェリンは行動した。

スカートの裾から手を入れて、おもむろにフラスコと試験管を取り出した。

影のゲートを作り出して転送させたのだが、悠斗から見たら種も仕掛けもございません状態である。

指と指の間に挟むように、都合8本。

全て魔法を使うための触媒となる液体が入っているものである。

彼女は力を込めて――バンザイをするように頭上へと放り投げた。ひとりでに割れてゆくフラスコと試験管。

「1発だ。受け取れ」

「は……？ いやいやいや、ちょっと待てえい！？」

エヴァンジェリンが今持てるほとんどの魔力を注いだ氷球。

直径など目測ではまるで分らないが、少なくとも闘技場を軽く覆い尽くせるほどの大きさだ。

勿論当たれば死ぬ。圧殺される。

それはもう無慈悲に、なんの抵抗もなく潰されるだろう。

——普通の人間ならば。

『氷神の戦鎚!』

闘技場上空、エヴァンジェリンの手から放たれる魔法。対する悠斗はそれを見て。

腰を落として、構えただけであつた。

冷静に、ただひたすらその機会を待つ――。

「頑張れ頑張れ出来る出来る無理無理死ぬって諦めるなよどうにかなるさ。だぁぁーっ! 死んだらぶっ殺すからなぁ!？」

というわけでもないらしい。恨み事はしっかりと言っていた。

氷塊がオベリスクを薙ぎ倒す。

――着弾。

轟音が鳴り響き、闘技場が潰されてゆく。

「コリヤ死ンダナ」

「マスター……」

非難するような眼で主人を見る従者たち。

「いや、少しやりすぎたとは思うがこれくらいでは死なんはずなんだ!？」

「今の彼には少し荷が重すぎたかと。それと別荘の修復に時間がかかります」

闘技場上空で話していると、ビシリ、と。小さく響き渡る氷が砕ける特有の音。

それを茶々丸の集音装置は逃さず捉えた。

闘技場を見やる茶々丸を見て、エヴァンジェリンも視線を送る。

「ケケケ。御主人ノ負ケカ」

「ふ、ふん。これぐらいは簡単に乗り越えてもらわなければ困る」

「その割には随分と焦っていましたか」

「ええい、余計なことを言うな！」

氷塊の天辺から放射状に亀裂が入り、終には粉々に砕け散った。

エヴァンジェリンが闘技場にいる男を見ると、ふと彼と眼が合った。彼は上げたままの右手を力なく振って、そのまま後ろに倒れた。

エヴァンジェリンたちはすぐさま闘技場に降り立ち安否を確認する。

「オオ、中々いい感ジヤネーカ」

「右腕と脚の損傷が甚大。呼吸、脈拍はありますがこのままでは時間の問題です」

「魔法薬をあるだけを持ってこい。ここで死なれると困る」

茶々丸が迅速に動き出す。

悠斗の右腕と両脚は悲惨なものだった。

肉は裂け、骨は突き出し、血が池のように溜まっており、気の弱い人が見れば気を失うであろう光景が広がっている。

「ふふ、やるじゃないか神無悠斗。貴様の勝ちだ」

そんな悠斗の頬を賞賛と、ほんの少しの愛しさを持って撫でるエヴァンジェリン。

彼の困難に打ち勝つという姿が、彼女の心に何かしらの影響を与えたのかも知れない。

その姿を後ろから眺めるチャチャゼロ。

「……マルデ乙女ノヨウダゼ、御主人？」

従者の声は主人に届くことはなかった。

4 時間目 とある生徒の異常な能力（ちから）

真っ白な部屋。その中央。

ケーブルを体中につけられた子供がいた。

ガチリ。スイッチが押されると絶叫とともに子供の体が跳ね上がる。ガチリ。別のスイッチを押せば悲痛な声とともに子供の体が焼かれる。

ガチリ。ガチリ。ガチリ。ガチリ。

子供の口から呻き声も出なくなったころ、白衣の男が子供に近寄る。黒髪の子供の顔を掴み、無理矢理顔を合わせて何か話している。話を聞いて、その子供は一言だけ発した。

——コロシテヤル——

……最悪な気分だ。

どうしてあんな児童虐待どころの話じゃない夢を見たんだか。

「気分はどうですか？」

「絡繰さん？ あいたたたっ！？」

声に反応して体を起こそうとすると、体中に痛みが走った。

どうやらベッドに寝かされているらしく、真っ白なシーツが体に掛けられていた。

窓からは夕日が差し込み、オレンジ色に染まる部屋とそこに1人座る絡繰さんが1つの絵画のように見えるくらいに綺麗だった。

「安静にしてください。完全に治りきらなかった部分もありますから」

治りきらなかった、……ってそんなに酷い状態だったんだろうか。自分の体を見ると右腕と両脚が固定されている。

……折れたのか！。
いや、あの氷塊を止めてこれだけで済んだのは奇跡と言ってもいいくらいだろうか。

「起きたか」

声がした方を見ると金髪少女がいつものごとく鎖に巻かれた状態で立っていた。

「……俺の負けか？」

恐る恐る聞いてみる。

いや、別に情報のことはいい。
話が聞けないのは残念だが、最悪父親か母親に聞けばいいと思っていた。

俺が気にしているのはリベンジが成功したかということが主である。

「ふん、貴様の勝ちだ」

……マジデ？

最後のあれで完璧に気を失って倒れたのに？

「いくつか聞きたいことがある」

「うん？」

彼女の言葉に驚いていると、唐突に話しかけられた。

彼女の表情からして真面目な話だろう。少しだけ居住まいを正した。

「どうやってあれを切り抜けた」

あれ、とは最後の魔法のことだろう。

正直死んだと思ったが、いやはやなんとかなるものだ。

「どう、って……。なんかこう魔法を使って？」

氷塊に拳を叩きこむ前に見たあの輝きは、恐らく魔法だったのだろう。

しかし、何がどうして使うことが出来たのかは自分でもよく分からない。

「なら、今は使えるか？」

「あー、分かん。そもそもどうやって使ったのか覚えてない」

いうなれば火事場の馬鹿力というやつだったのだろう。

これが一番いい表現のような気がする。

俺の答えを聞くと彼女は考えだし、やがて棚から小さな棒を取り出してきた。

「プラクテ・ビギ・ナル 『火よ灯れ』。やってみろ」

彼女が呪文を唱えると棒の先にちょうどライターのそれぐらいの火が点いた。

そのままその棒を手渡される。
やってみると言われてもだな……。

「ええと、プラクテ・ビギ・ナル？　アールデスカット？」

なんだか情けない感じの声を出してしまったような気がする。
勿論火など点くはずもなく、空^{むな}しい感じがひしひしとする。

「ええつと……、今のはどういう意味なんだ？」

空気に耐えられず話してみる。

「日本語で火よ灯れ、だ。魔法学校でも1番最初に習う魔法だな」

「ふむ……？　火よ灯れ」

日本語でそのまま呪文を唱えてみる。

棒の先にライターのように火が点いている。出来た。

……出来た！？

あ、消えた。

「ククク、はっはっはっは！　つくづく規格外な奴だなお前は」

「いや、そんな笑われても困るんだが」

規格外とか言われてもどうおかしいのかは俺じゃあ分からないし。
多分、日本語で魔法が出来たってのがおかしいんだろうけど。

「魔術的な神秘を全て無視して魔法を扱える。これが規格外じゃなければ何がおかしいのか分からんくらいだ」

「そうなのか、さっぱり分からん」

魔法的な神秘ってのは呪文を唱えるときの韻やらなにやらだろうか？
日本語でも古い言葉にはありそうだな。一応呪術とかあったわけだし。

「さて、貴様の勝ちだからな。私に答えられることなら答えよう」

「神無について」

一番知りたいことはそれだ。

目の前の少女はあの夜、あの神無か、と言った。
多分それが意味することは――

「神無は昔、神に成るという字を書いて神成だった。日本の呪術師、魔法使いの中でも有数の一族だったんだよ」

やっぱり魔法関係か。

「神降ろしという言葉を知っているか？」

「神降ろしつーと神様を儀式で呼び出して体に憑依させて云々だったか」

確かこんな感じだったはずだ。

「大体そんな認識でいい。日本の呪術師の家系では多々行われてたことだ。」

そして神成、いや、まだ無銘の家系だった貴様の先祖たちがそれ以

上のことは出来ないのか、と行っただのが――」

「……人を、神に成り上げること、か」

言葉だけ聞けばすごいことではあるが、何せ呪術である。
何か代償、もしくは犠牲を払っているに違いない。

「貴様が思っている通りだろうよ。詳しいことは出回っていないが、
相当に犠牲を出したんだろうさ」

自分の先祖とは言っても胸糞の悪い話だ。
いや、自分の先祖だからこそ、だろうか。

「無銘の呪術師は神成となり繁栄を極めたが、徐々に衰退。今はほ
とんど力もない、神無になったというわけさ」

へえ、うちも色々あつたんだなあ。

うん？

今はほとんど力もない？

「俺はなんで魔法を使えるんだ？」

「別におかしくはないさ。貴様の父親も母親も魔法使いだ。力は衰
えているだけであつて、なくなったわけではないからな。だがまあ、
お前は才能があるほうだろうよ」

日本語って難しいな、おい。

俺としては完璧に才能も潰えたように聞こえたんだが、そうではな
いらしい。

「私が知っているのはこんなところか。もつと詳しい話が聞きたければ貴様の両親が、関西にある呪術協会にでも行くんだな。ああ、ここの学園長のジジイでもいいぞ」

「ここのトップも魔法使いなのかよ……」

いや、こうやって目の前の少女のように人を襲う魔法使いもいるわけだから、偉い人たちの中に紛れ込んで後処理やら何やらをする人たちがいるんだろうな。

さて、ここの学園長が魔法使いだと分かると、結構な人が魔法使いっぽく見える。

俺の眼では魔法使いは基本的に一般人より体から発する光の量が多いように見える。

目の前の少女然り、うちの両親然り。

あとはデスメガネこと高畑先生やら、グラヒゲこと神多羅木先生やら、葛葉先生もそうだろうか。

……おそらく、俺の悪友も。

「さて他にはあるのか？」

「……お前のその鎖をはずすから、魔法を教えてくれないか？」

そもそも鎖ははずすつもりだったが。

出来るのにしないってのは何か気分悪いし。

「……普段なら面倒だと言うところだが、いいだろう。貴様自身にも興味があるからな」

「おお、ありがとう」

素直に感謝だ。

さっそく少女に絡みつく鎖をはずそうとして、体に激痛が走った。忘れてた。俺今怪我人だったんだっけ。

「今日のところは休んでおけ、神無悠斗。お？　つとと……」

「大丈夫ですか？　マスター」

少女が出て行こうとすると、いきなりふらつき絡繰さんに受け止められた。

大丈夫だろうか？

「さすがに魔力を使いすぎたか。少し目眩がする」

「大丈夫なのか？」

絡繰さんに支えられてないと今にも倒れそうな状態に見えるから、大丈夫ではないのだろう。

「血を吸えば少しは楽になるが……」

「血い！？　なんでまた血なんか」

「む、言ってなかったか。私は吸血鬼なんだよ。ま、それ以外にも魔法使いの血には魔力が少なからず含まれているんだがな」

はあ、こんな少女が吸血鬼ねえ。

世の中何があるか分からないものである。

「怖いかな？　今ならさっきの魔法を教えてもらうというのも撤回し

「てもいいんだぞ？」

少女の試すような、しかし他にも意味を含むような口ぶり。
言っちゃあ悪いが、全く怖くない。

話した感じ悪人というわけでもなさそうだし、わざわざ俺を助けてくれたし。

「……飲むか？」

左腕を差し出してみる。

少女は驚いた表情を見せた。

そうして少女は少し悩んだ末にベッドの縁に座った。

というか、俺はいつまで少女って表現しなきゃならないんだ。

「あー、それで。なんて呼べばいいんだ？」

「まだ名前も名乗っていなかったか。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。エヴァでいい。あと、今のお前からあまり血を抜くと死ぬかも知れんぞ？」

「そこまでは勘弁してくれ。せつかく拾った命だ、大事にしたい。いつ……！」

腕を噛まれた。

おお、吸われてる吸われてる。

こりゃ献血してるみたいだなー。

「ふむ、不味くはない……。が、美味くもないな」

「さいですか」

血の味なんぞさっぱり分らんよ。

やっぱり男よりもうら若き乙女とかのほうが美味しいのだろうか。

「お、おろろろ?」

少しフラツときた。

流石にやばいか。

「ふむ、薬を渡すから飲んでおけ。少しは楽になるはずだ。今はゆっくり休め。私も少し休む」

エヴァは緑色の液体が入った試験管を俺に渡して、絡繰さんに連れられて行った。

改めて薬を見てみるが、毒々しい……。

普段だったら絶対飲まねえわー。

覚悟を決めて、せーの、ほい。

「不味っ」

「良薬、口に苦しです、神無さん。お水をどうぞ」

「ああ、ありがとう。絡繰さん」

戻ってきていた絡繰さんからコップを受け取る。

ひんやりとした液体が喉を潤す。

窓から風が入ってくる。

夕日もだいぶ沈んで空に星が見えるようになってい
ん、夜?

「おおあつ！？ 帰らなきゃ！？ あいだあつ！？」

「いけません神無さん、安静にしてください。それと、時間の
ことなら大丈夫です」

「は？」

「どうのことだろうか。」

「もうこんなに日も落ちて暗くなり始めてるというのに。」

「外の1時間がここでの1日になるんです。その代わりにここからは丸1日出ることが出来ませんが」

「えーと、つまり。」

「ここに入っただのは3時頃だから、ここを出ても4時頃ってことか！

「すげえな、魔法……」

「便利すぎるだろ。」

「つまりは外をがん無視して1日中ここに籠ってれば1日が24日になるのか。」

「1か月で掛ける30か31で720日か744日。約2年分。
テスト前とかやりたい放題じゃねえか。」

「それでは、ゆっくりと休んでください。悠斗さん」

「——……。ありがとう、茶々丸さん」

彼女は丁寧にお辞儀をして部屋から出て行った。
溜め息を吐く。

魔法、ね。

父さんと母さんがなんで俺に話さなかったのか、とか。
火之川が魔法使いかも知れないとか。
色々思うところはあるけど――。

「お休み」

今は、寝よう。

「何？ 悠斗とエヴァンジェリンが接触した？」

「はい、確かです。その後の様子は確認できませんでした」

エヴァンジェリンの別荘で悠斗が寝ている頃。

神無家のリビングで神無秋斗と悠華、それともう1人、室内でもマフラーをしている火之川真が集まり話をしていた。

「くそつ、ダークエヴァンジェル闇の福音め。やはり悠斗を利用するつもりか」

忌々しい表情で吐き捨てる秋斗。
なにがそこまで彼にエヴァンジェリンを嫌わせるのかは分からない
が、相当なものである。

「いえ、それが……」

「どうした？」

「どうやら、悠斗がエヴァンジェリンの方に会いたかったらしいんです」

絶句。

その表現がぴつたりと当て嵌まるほどに秋斗は凍りついた。

自分の息子が、何故？

魔法のことなど教えていないし、エヴァンジェリンとの接触も忘れてはいるはずだ。

彼は彼の息子が平穩無事に暮らせるように最大限配慮してきた。

「何故だね！？」

「……その、どうやら前回の接触時に受けた記憶消去の魔法を悠斗^{レジスト}が抵抗してしまったようで」

「……っ！　くそっ！」

「秋斗さん……」

悠華が秋斗に小さく声を掛ける。

彼女として自分の息子が心配だが、自分の夫もそれと同じくらいに心配している。

「俺はあの子に、悠斗に、何事もなく生きて欲しいだけなのに……っ！」

悲痛な声を上げる秋斗と、秋斗に寄り添う悠華。

そして、それに冷ややかな視線を送る真。

「……報告としては以上です。私の精霊が反応を返してきませんか、エヴァンジェリンに見つかったか、報告を返せないところにいるか。そのどちらかです」

「……分かった、いつもありがとう」

真の言葉に小さく礼を述べる秋斗。

真はそのままリビングから出ようとドアノブに手をかけ、止まった。

「……これは独り言ですが」

「うん？」

「そろそろ籠から出してあげてもいいのでは？ 悠斗は、自分の意思で彼女に会うことを選んだのですから」

親が保護する時間は終わったのだと、真は言った。

秋斗も悠華も息を呑む。

自分たちの味方だった人物が、いきなり裏切るような発言をしたのだ。無理もない。

「いや、そうだな。その通りなのかも知れない」

「真ちゃん……。秋斗さん……」

「それでは、失礼します」

真は振り返りもせず、神無家から出て行き、溜め息を吐いた。

「やはり少し過保護に過ぎるな、神無さんは。ユートを想う気持ち
が本物なだけにあまり悪くは言えないし」

真は悠斗が魔法に関わることを反対してはいない。

真自身も魔法使いであるし、何よりも悠斗が自分で選択したことな
らばそれでいいと思っている。

勿論、危険なことの方が多いが、そういうことになったら助けられ
ばいいと考えている。

悠斗自身が決めたことなら、あまりにも人道から外れてなければど
んなものであると助力する。

「うむ、我ながら気持ち悪いほどにユートの味方だな」

真が言った言葉を受けて、秋斗と悠華がどう変わるかは分からない。
今は彼らが良い方向へ向かうことを信じるばかりだ。

「いつそのこと私からバラしてしまってもいいかもな」

クツクツと笑いながら寮へと帰る真。

その眼はどこを見ているのか。

当人ばかりが知るものである。

5 時間目 とある生徒と魔法の授業（前書き）

ちよつと今回から自分的な設定、解釈が含まれています。
御注意ください。

5 時間目 とある生徒と魔法の授業

ベッドの上で上半身だけ起き上がる。
今何時だろうか。

珍しく母さんが部屋にいない。
というか俺の部屋こんなだったっけ？
ボーっとした頭で考える。

——学校行かないと。

「おはようございます、悠斗さん。よく眠れたでしょうか？」

「ああ、茶々丸さん。おはよ、う？」

ベッドから降りようとして、声を掛けられた。
ドアの脇に、メイド服を着た緑色の長髪の女の子がいる。
思い出した。

「ここ、エヴァの家か……」

「はい、正確に言えばマスターの別荘ですが。体の具合はどうでしょうか？」

右腕と両脚の走るような痛みは無くなっていた。ギプスで固定されているのが煩わしいくらいだ。
その代わりに全身筋肉痛だが。

「とりあえず腕と脚に痛みはないよ」

「歩くことはまだ控えておきましょう。背中を貸します」

ベッドの近くに寄ってきて背中を見せる茶々丸さん。
乗れってことなんだろうけど……。

「うん、嬉しいけどせめて肩にしてくれ」

「何故でしょうか？」

「少し、恥ずかしい」

流石に女の子に負ぶってもらうのは抵抗があるのだよ。
男の変な意地である。

「分かりました。では肩を」

「ありがとう」

茶々丸さんの肩を借りてよたよたと部屋を出る。

昨日（というか気絶から眼が覚めた時）には気付かなかったが、寝かされていた部屋は塔の内部だったらしい。

内部も壁も白が基調となっており、絵画や装飾品、置物が邪魔にならない程度に置いてある。

階段を上がって一息吐く。全身筋肉痛の今の自分にはこれだけでも辛かった。

「悠斗か。よく眠れたか？」

「おかげ様で。腕と脚も随分良くなってるよ。全身筋肉痛だがね」

テラスのような場所でエヴァとチャチャゼロがグラスを傾けていた。エヴァがワインでチャチャゼロは日本酒か。というかチャチャゼロって酒を飲んでも平気なのか？

「飲ム力？」

「流石に遠慮しておくよ。未成年だしな」

「ツマラネーナ」

そう言つてチャチャゼロはグラスを傾けた。いやいや、何言つてんだ。

ただでさえ頭に血が回ってない状態で、しかも空きつ腹に酒なんぞ入れたら確実に吐くわ。

席に座つて、辺りを見回す。

どうやら闘技場の奥にあった建物らしい。

闘技場も悲惨なことになっているかと思つたが、元通りである。

「お食事をお持ちしました」

「え、ああ、ありがとう」

茶々丸さんが食事を持ってきてくれたらしい。普通に豪華である。いざ、食べようとするとなんだか視線が気になった。

「……」

「……？」

俺の向かいに座るエヴァの後ろで首を傾げる茶々丸さん。
そうやってじつと見られてるととても気まずいんだが。

「座らないの？」

「主人と同じ席に着くなど出来ません」

む……。

これは俺じゃあ無理かも知れん。

「エヴァ、なんとか言ってくれないか」

「面倒な奴だな。茶々丸、お前も座れ」

「しかし……。いえ、分かりました」

渋々といった感じにエヴァの隣へ座った。

普通後ろに立つてもらっても気になるだろう。

エヴァが少し変なんだと思うが、口には出さない。

「悠斗」

「はいっ！　なんでしょうかエヴァンジェリンさん！？」

「何をそんなに慌てているんだ、お前は」

いや、魔法使いだし考えてることくらい読めそうだな、と思って。
口が裂けても言わないが。

「まあいい。食事の後に簡単な魔法をいくつか教える。この私が直

々に教えるんだ。感謝しろよ?」

なんだ、魔法のことか。
てつきりエヴァが変って思ったことがバレたのかと。

「おう、ありがとう」

「ケケケ。御主人ハスパルタダカラナ、頑張レヨ」

さて、食事も終わりましたあの不味い緑色の薬を飲んで一息吐いた頃。
エヴァが体の鎖を鳴らしながらあの棒を持ってきた。

気付かなかったがここだとエヴァに巻きついていて体の鎖が一番大きい1本だけである。

ここでエヴァが普通に魔法を使えることと関係があるんだろうな。

「初心者用の杖だ。お前にやるよ」

「うん? 杖がないと魔法は使えないのか?」

エヴァは何もなしで使ってたな。

「普通の人間は杖、というより発動体があれば使えん。私は吸血鬼の中でも上位のものだから必要ないがな」

へえ、そういうものなのか。

そういうことならありがたく頂いておこう。

「では復習からだ。まずは日本語でいい」

「はいよ。……火よ灯れ！」

音を立てて杖の先に火が灯る。

昨日はハイになってて出来たって考えもあつたんだが、今回も問題なく出来た。

「上々だ。では次、ラテン語」

「あれラテン語だったんかい。えーっと、プラクテ・ビギ・ナル
アールデスカット！」

……出来ない。

日本語で出来て本来のラテン語で出来ないとか意味が分からん。
ラテン語が分からないからか？
悩んでいるとエヴァが俺を呼んできた。

「どついつ訳かは知らんが、どつやら発動する寸前でお前が無意識
に魔法を使うのを止めている」

「……はあ？」

それはつまり出来ないんじゃないじゃなくて、俺がわざと失敗するように
しているってことか？
難儀なことだ。

「しかし、まずいな。このままだとお前の異能がすぐにバレる」

「む、聞きたくないが、もしバレたらどうなる？」

「そりゃあ実験動物か、もしくは監禁か」

ゾツとする話だな。

まあ言った本人がニヤニヤと笑ってるからそこまで酷いものじゃないとは思うが、万が一ってこともある。

「ま、異能なんて隠しておくにこしたことはない。人は自分たちと違うものを本能的に拒絶する生き物だからな」

「……そうだな」

また拒絶されるのはちよつとごめんだね。

今考えるとあの時期は嫌な思い出しかない。よくちゃんと育ててくれたな、俺。

「いつまでボサツとしている！ さっさと練習せんか！」

「うい！ 申し訳ありません！」

まあ、今はエヴァや茶々丸さん、チャチャゼロもいるし、大丈夫かな。

はい、結論から言つとですね。

「俺、普通に魔法を使えなくね……」

「日本語デナラ初步魔法使エルノニナ」

火よ灯れ以外の魔法も教えてもらったけど、全部日本語でなら使えてラテン語では発動しなかった。

まずい、実験動物へ一直線かも知れん。

「まあ、予想はしてたがな」

「そりゃあな。違う魔法でも魔法なんだから同じようになるよな」

何かいいアイディアはないもんかね。

日本語で呪文を唱えても違和感がないようにか、もしくは……。

「呪文を唱えなければいい？」

「無詠唱魔法か。あれは難易度が高いぞ？」

「え、まじで」

もつとパツと出来るもんだと思ってたんだが。

「呪文というのは言霊だ。それ自体が力を持っている。魔法を扱う際に、始動キーで自身の魔力通路の扉を開き、言霊で力を認識して、魔法発動体が自身と世界を繋ぐ。無詠唱魔法というのは前2つの形式をすっ飛ばして使うということだ」

「始動キー？」

「自分専用の単語だよ。私のはリク・ラク・ラ・ラック・ライラッ

ク。子供の練習用にあるのがプラクテ・ビギナル」

ああ、それってそんな意味があったんだ。
てつきり呪文の一部かと。

「ま、お前の日本語魔法も無詠唱魔法と似たようなものだがな。始動キーも詠唱も省略している」

む、確かに。

これなら無詠唱魔法も同じように使えるんじゃないかと、思ったがエヴァがなにやらこつちを見て笑っている。

「笑ってるってことは、あれか。なんか他に出来ない理由がありそうだな」

「さて、案外出来るかも知れんぞ？」

まあエヴァが難易度高いつて言ってたんだ。止めておこうか。ミスって怪我がぶり返したりでもしたら眼も当てられんし。

「なんだ試さないのか。ツマラン」

「分不相応なことはしない主義でね。もう少しエヴァに習ってからにするよ」

肩を竦めて返事を返す。

何事も基礎が出来てからだよな。

そもそもどこまでが基礎なのかも分かってないわけだし？

「マスター。そろそろ時間です」

「うん？ もうそんな時間か。久しぶりに時間が短く感じるな」

茶々丸さんが声を掛けてきた。
時間？

「何の時間？」

「お前、ずっとここで暮らすつもりか？」

……ああ！

やべやべ、すっかり忘れてた。ここってエヴァの別荘なんだっけっか。

で、24時間がそろそろつてことか。

エヴァたちと一緒にここに来た時のように魔法陣の上に乗る。
徐々に光に包まれて――

眼に映るのは地下の部屋だった。

うーむ、魔法つつつてもこの技術はすごいんじゃないかな。うっか。
なにせ人間大の質量を移動とかさせるわけだし。

実はエヴァってすごい魔法使いなのか？

そう思っ先を歩くエヴァを見るとジャラジャラと鎖が見えた。

「おー、やっぱりこっちだと鎖が多いな」

「別荘だと少ないのか？」

「一番大きいのが1本だけだったよ」

リビングに戻り、ソファに腰を掛けて話す。

茶々丸さんがお茶を淹れてくれるそう。

うむ、鎖は小さいものから大きいものまである。

エヴァに信用してもらったために抜いたのは一番小さいやつだったか。

「それじゃあはずしてみますかね」

全部で13本。

大きいやつほどこれの基になってるものに近いだろうから小さいものから抜いていこうか。

まず1本目。簡単に抜けた。

続いて2本目。少し固いがなんとか。

3本目。全力でやってようやく抜けた。

4本目——は、こりや無理だ。固すぎる。

「魔法生徒の平均くらいか。無いよりはまし、というところだな」

「オオ、動ケル」

チャチャゼロが喜んでいる。

エヴァの魔力が少し戻ったから動けるようになったようだ。

しかし、3本抜いてその程度かよ。たまったもんじゃねえな。

魔法生徒の平均うちゅうのがよく分からんけど。

「すまん、今の俺じゃこれが限界だ」

「気にするな。これだけでも十分くらいだ」

魔力が全くない状態からすれば良い方なのか。

まあ、飛んだり出来るから日常生活にも便利そうだしな。

ああ、でも人がいるところでは使えないか。

「じゃあ、次はいつ来ればいい？」

しばしお茶を飲んでエヴァたちと歓談。
良い時間になったんで帰ろうじゃないか。

「どうせだったら毎日来い。練習にならんだろうが」

「あー、それもそうだな。夜からでもいいかね？ 俺も人付き合いがあるし」

「構わん」

ログハウスの玄関で立ち話。

家の中で話し込んでいたみたいで、随分と辺りが暗くなっていた。
電灯が点いているつつつても森の中だからちと怖いね。

「じゃあまた明日」

「ああ、ちゃんと来いよ」

「お疲れさまでした」

「次ハ酒デモ持ッテコイヨ」

エヴァたちと別れて1人森の中を歩く。

まあ、森つつつてもそこまで長いこと続くわけじゃないけど。
いくらちらほらと明りがあるとはいえ1人で歩くことの不気味さは

半端ない。

なんかこう、出そうじゃん。見えたらまずいもんとか、変なおっさんとか。

そんなことを考えて歩いていたからか、小さな物音に飛びあがってしまった。

なんだ？

近くじゃない。もっと遠く。微かな音だった。

行くか……？

魔法講習の時にエヴァが片手間に説明していた、外からの侵入者と麻帆良の魔法使いが戦っている音だと思っただが。

迂闊に見に行つて危なくなるのはまずいしなあ。

……よし、行こう。

遠目に見てパッパと帰ろう。

触らぬ神に祟りなし、だ。

森の中へと入っていく。

この後、面倒事に巻き込まれるとも知らずに。

6 時間目 とある生徒と魔法な修羅場

金属特有の甲高い音と木が倒れる音、それと話し声だろうか。

薬のおかげで随分と楽になった体の状態を確認しつつ、慎重に音の中心へと歩を進める。

不意に足が止まる。

……？

進めない。いや、進みたいのに進みたくないという矛盾した気持ちが足を止めている。

辺りを見回してみると、いつの間にか薄く靄もやのようなものが立ち込めていた。

魔法的な何かだろうか。

いくら不思議都市麻帆良と言っても森の中にこんなに不自然に靄がかかったりしないだろ。

さて、魔法的なものと分かれればどうにかなりそうだ。

選択肢としては、頑張つて突っ切るか、靄の薄いところを探すか、この靄の出所を抑えるか。

薄いところを探してもいいんだが、正直そんなに時間を掛けたくないし、あるかどうかも分からない。

出所を抑えるのは靄の濃い方へと進めばいいだろうから薄い場所を探すよりも簡単だろうが、それをいじった時にどうなるか分かったものじゃない。却下。

と、なると――

「無理矢理行くしかないか……」

結局それである。

助走を取って、走り抜ける！

問題なく抜けることが出来た。

気持ちの持ちようというところもあるんだろう。

何かがあるということを認識しているのと、していないのでは随分違う。

そういうことだと思う。

さて、ここからはもつと慎重に行かないとな。

む、木々の奥の方でチカチカと発光したりしてる。近いな。そつと木陰から様子を窺^{うかが}う。

あれは……グラフィゲと、葛葉さん？

それと、鬼、だろつか。

10体程の鬼らしきモノを相手に2人だけで戦っている。

白いスーツに眼鏡、銀の長髪で刀——太刀、だろつか——を持つ葛葉先生はいかにも剣士といった風体だ。

近寄る鬼（仮）を反撃すらさせずに斬り伏せてゆく。

黒いスーツにサン格拉斯、オールバックにヒゲという格好の神多羅木先生はまんま魔法使いといった感じの戦い方。

ひたすら指パッチンで風の魔法を連射して的確に葛葉先生を援護する。

これが、魔法使いの戦い……。

葛葉先生が刀を振るえば地が裂け、雷光が迸り、桜吹雪が舞う。

神多羅木先生が腕を振るえば風が吹き、嵐が起き、竜巻が切り裂く。というか木をばっさばっさと薙ぎ倒してるけどいいのか？

そのうちこの森が無くなるんじゃないかなろつか。

「あらかた片付いたな」

「そうですね。術師も捕えましたが、今日は終わりでしょう」

む、終わったか。

先生2人組の圧勝って感じだったな。

じゃあ気付かれないうちにさっさと帰ろう。

ふと、先生たちがいる場所よりも奥の影に意識が行った。
違和感。そう表現することしか出来ないが、確かに何か引つかかった。

目を凝らして違和感を探る。

闇に浮かびあがる形は――背を向けている葛葉さんに武骨な大剣を振り下ろそうとしている鬼の姿！

「っ！？ 葛葉！」

「えっ！？」

グラヒゲも気付いたが葛葉さんに射線を遮られている。
制服のポケットから杖を取り出して振るう。
間に合え！

「火の矢あ！」

杖の先から一筋の赤い光が放たれ、鬼の顔面に直撃した。
見よう見まねだったけどなんとか出来たか。
一応エヴァに教えてもらっておいて良かったな。

「何奴！」

まあ当然のごとくノーダメですけど。

だけど、動きを止めてこっちに意識を向けた時点でお前の負けだよ
馬鹿野郎。

「斬岩剣！」

葛葉さんが鬼を一刀のもとに斬り伏せるのを確認して逃げ出す。

ヤバイヤバイヤバイ！

つい手を出しちまった！

エヴァの家に逃げ込むか？

いや、自分の蒔いた種だ。巻き込むのは駄目だ。

となるとここから家まで逃げ切るか、麻帆良の街を逃げ回るか。

……撤くまで逃げ回るしかないな。

家がバレるのはまずい。いや、声でバレてるかも知れないけど。

それでもそのまま家へ直行するよりはいいだろ。

しかしまあ、また鬼ごっこはね。

子供じゃねえんだから追い回すのは止めて欲しいね。

「どうします」

走り去る何者かを見つめながら葛葉が言葉を発する。

彼らは2人で1組のチームなので片方だけが単独行動するのはまずい。

「うちの生徒のようだが、一応追っておいた方がいいだろう」

言うや否や、2人はその場から飛ぶように走りだす。

神多羅木は魔力で、葛葉は気で身体を強化して普通の人間以上の身体能力を発揮できる。

魔法のまの字も知らなかった悠斗に追いつくことなど容易いものである。

「あんまり派手にやるなよ？」

「言われなくても分かってます！」

葛葉が扱う剣術、京都神鳴流は奥義となると雷を出したり桜吹雪が舞ったりと何かにつけて派手なのである。

今回の不審者は都市内に逃げ込もうとしているので神多羅木は釘を刺した、ということだ。

とはいえ神多羅木も、何も葛葉が考えなしに動くとは思っていないので冗談交じりにだが。

逃げる背中が見えた。

葛葉が取り押さえるその瞬間に不審者は振り向く。

「光よ！」

「なっ!？」

初心者用の杖の先から一際強い光を発しての目晦まし。

暗い森の中、その上至近距離にいた葛葉はそれを直視してしまった。神多羅木はサングラスをしているため無効。

「む、やるなあ」

「感心してる場合じゃないでしょう！」

パチンツと小気味良い音が鳴り響き捕縛用の風の矢が不審者を追いかける。

背後から高速で迫る魔法を、不審者はチラリと見て横へと飛んだ。

神多羅木はそれに合わせて射出した矢を追従させるがどうにも捕まらない。

矢を2本、3本と増やしていくが上手く逃げ回る。

「……本当に素人か？」

神多羅木が小さく呟く。

捕縛用の矢はすでに20本近い。

それにも拘らずそれを魔法で相殺もせずひたすら逃げ続けているのだ。

転げまわったり色々と格好は悪いが1本も掠りもしない。

神多羅木としては苛立ちはなく、むしろ賞賛したいくらいであった。

「だがまあ仕事なんだな。ディグ・ディル・ディリック・ヴォルホル 逆巻け夏の嵐……」

神多羅木が詠唱を始める。

不審者もそれに気付いて時々振り返りながら逃げている。

いや、不審者^{ふっしや}が見ているのは神多羅木ではなく――

『風花旋風 風牢壁！』

森の中に中規模の竜巻が発生する。

対象を中心に竜巻を発生させ拘束する魔法。

一度発動すれば例外なく竜巻の中に閉じ込められる。はずだが。

――神多羅木が使う魔法の範囲。

逆巻く竜巻に足を踏み出し、風に乗る。

竜巻というのは上昇気流を伴う。それは魔法でも同じである。

悠斗はそれを利用して一気に上空まで浮かび上がった。

勿論普通は出来ない。

この魔法は竜巻だけでなく風の刃も同時に発生する。
悠斗と同じことをすれば全身を切り刻まれることになる。

「捕まえましたか」

「……いや、逃げられた」

「はあっ!？」

魔法が使われたことを感じ、未だ視界がチカチカと点滅している葛葉がゆつくりと神多羅木に近づいてきた。

しかし神多羅木から返ってきた言葉は葛葉が予想していたものとは真逆のものだった。

葛葉が大声で驚くが、無理もない。

何度も言うが普通なら逃げることは不可能なのだ。

出し抜かれたことに苛立ちを感じる葛葉。

それとは対照的に感心している神多羅木。

やがて、葛葉は大きく溜め息を吐いて神多羅木に向き直った。

「仕方ありません。式神を飛ばして、私たちは学園長に報告だけしておきましょう」

「ああ」

悠斗が逃げて行ったであろう方向を見やる神多羅木。
サングラスに隠された眼に何が映っているのか。

眼下に広がるのは広大な夜景。

所々に点いている街頭と相まって夜空のようにも見える。

さて、絶賛空中散歩中な俺だが、これ死ぬんじゃないか？

主に落下の衝撃とかで。潰れたトマトのような未来が俺を待っている？

……。

嫌だああああああ！

どうにか俺に生存ルートを！

ハッピーエンドを迎えさせてくれ！

「風よ、風よ、風よ風よ風よおっ！」

エヴァに教えてもらった初歩の風魔法を使っがさっぱり速度が落ちない。

頼む、まだ死にたくないんだ！

「オー、中々面白いコトニナッテルジャネエカ」

「チャ、チャチャゼロさん！？ 助けてーっ！」

いつの間にかチャチャゼロが背中に黒い翼を生やして隣で笑っていた。

笑ってないで助けてっ！？

「魔法使イナダカラコレグライ自分デ切り抜ケナイト先ガツライゼ？」

「初心者は何やらす気だ、お前はーっ!？」

ええい、俺のことを助ける気はないみたいだ。
タイムリミットは刻々と迫っている。

何か、何かないのか!

民家、街路樹、街頭。……あれだ!

「チャチャゼロ! あれ! あの街頭に直撃する位置に移動させてくれ! それだけでいいから!」

「アイヨ」

空中でチャチャゼロに押しもらって軌道修正。

くそっ、どう頑張っても両脚イカれるな。

エヴァは薬を処方してくれるだろうか。

考えても仕方ない。今はこの危機を乗り越えるのみ!

「せえええええのおおおおっ!」

空中で無理矢理体勢を整えて派手な音を立てて街頭に脚から突っ込む。

街頭の支柱は耐えきれずに折れ曲がり、勢いを殺しきれずに紙切れのように体が飛ぶ。

でもここまで速度が遅くなれば……っ!

「風よっ!」

地面に着く前に風でもう一度速度を落として、転がる。

3回4回と転がってようやく仰向けに止まる。

生きてる……よな?

よかったあー……。

今日でもう一生分の頑張りはしてみせたと思うんだが、どうだろうか。

脚は痛いを通り越して感覚無いし。

俺の脚ちゃんと動く？ 大丈夫？

「チツ、折レナカッタカ」

「怖えこと言うんじゃないよ！？ ただでさえ全身ぶっ壊したばかりなのによ！？」

チャチャゼロが残念そうにしているが俺としては一安心である。
しかしすげえな、折れてないのか。

脚だけトマトになることも覚悟してたんだが。

頑丈な体万歳！

「ホラヨ。御主人カラパクツテキテヤットイタゼ」

「あー、すまん。ありがとう」

なんだか見慣れてしまったフラスコに入った緑色の液体。
一息で飲みこむ。不味い。

いつかこれも不味いと思わなくなる日が来るんだろうか。
そこまで飲みたくないんだが。

「で、なんでチャチャゼロは来てくれたんだ？」

「ソリヤ、ナンダカ面白ソウナコト二巻キ込マレテタカラ笑イニ」

そんなこつたろうと思ったよ、ちくしょう。

でもまあそのおかげで助かったし結果オーライってことでいいのかね。

今回も死ぬかと思ったわ。

エヴァといい、グラヒゲといい魔法は危険すぎる。

仰向けに倒れていると小さな光球が上空をフラフラと飛んでいるのが見えた。

「なんだあれ」

「アリヤ東洋式ノ使イ魔ダナ。式神ダツタカ」

む、俺たちの頭上で止まった。と言っても随分高い所にいるが。魔法使いつてのは西洋魔術師のことらしいからグラヒゲじゃないな。となると葛葉さんか。

どうやって撒くか……。

立ち上がって服を払い、チャチャゼロを拾い上げて通りを歩く。

まあこういう時のお約束としては――。

路地へ入り、駆け出す。

麻帆良の路地は随分と入り組んでるからこういうことには適してるな。

道によってはすぐに大通りに繋がってたりするけど。

「チャチャゼロ、追って来てるか？」

「コンナ調子ジャ逃ゲラレナイクライニハナ」

マジかよ。

結構な速さで走ってると思うんだが。

「やべっ、大通りか」

「ツーカー、イツマデオレヲ抱エテンダヨ」

「すまん。もうちょっと付き合ってくれ！」

ぶつぶつ言ってるチャチャゼロに言葉を返しながら次の路地へと入る。

とりあえず魔法でも使ってみますかね。

「闇よ！」

ポケットから杖を出し、振り向いて空へと向けて放つ。

放たれた黒い球体は屋根を越えたあたりで破裂して、数瞬の間だけ俺たちと式神を遮る壁となった。

その隙に物陰に隠れてみる。

フラフラと辺りを探るように光球が飛んで行くのが見えた。

ふむ、成功かな？

念のためにもう少し待つか。

「……帰ッテイイカ？」

「飽きたのは分かるがもうちょい待ってくれ」

いや、まじで。

見つかつたらまた走ったりせなあかんから。

しかし、どっちだ？

式神を使って人手を増やしているのか、それとも面倒で式神だけ飛ばしたのか。

素人相手にそこまで労力はかけないと思うが、ね。

「……もついいな」

どのくらい時間がたったか。
物陰から顔を出して空を見回しても発光する飛行物体は見当たらない。

「すまん、助かったよ」

「次ハモット血塗レノ状態ダツタリシロヨ」

「それは遠慮したい」

チャチャゼロの言葉は冗談なんだか本気なんだか分からん。
エヴァは分かりやすいし、茶々丸さんはあれでいて結構表情豊かだ
つたりするからな。

「えっと、送ってった方がいいのか？」

「アホ力。サツサト帰レ」

普通に怒られた。

いやまあ当たり前なんだけれども。
俺は逃げてる立場だし、見つからないように帰らないといけないよ
な。

「すまん、ありがとう！」

「明日八酒持ツテ来イヨー」

背中に掛けられる声に振り返って手を振って路地を縫うように走る。

今日はとんだ厄日だったな。

そう思いつつも少しでも口角が上がるのが自分でも感じ取れた。
魔法、ね。

良い師匠も居ることだし、少し頑張ってみようじゃないか。

7 時間目 トラブルだらけの外出

エヴァとの修行（という名のイジメ）が始まってから3ヶ月ほど。ほぼ1日1回エヴァの別荘に行っていたから、体感時間としては約6カ月。

驚いたことに学園側からの追及は無く、いつも通りの生活をしていった。

変わったことと言えば少しだけ親父と母さんが拳動不審のような気がしたが、もしかしたら見間違いかも知れない。

「ユートよ。世間一般的にはもうすぐクリスマスらしいが、予定は？」

「ねえよ、そんなもん」

そしていつもの通りに喧嘩を売ってくる悪友。

若干くたびれている赤銅色のマフラーで口元まで覆い隠しているマコト。

そういや、このマフラーっていつからしてたっけ。

記憶を思い馳せながら野郎2人でイルミネーションが彩る麻帆良を歩く。

「うん？ 喧嘩か？」

不意にマコトが声を上げる。

つられてマコトが向いている方を見ると、道着を着たガタイのいい男たちが揉めている。

道着ってことはどこぞの格闘技系の部活か。

こんな大通りでやってたらずぐに広域指導員が飛んでくるだろ。

あまり関わりたくないのですサッサと横を通り過ぎようとしたら肩を掴まれた。

「おう、こらあ！ お前も空手部か！？」

「え、いや、違っ」

問答無用と腕を取りにくる男。

柔道部、か？

なんにせよ――

「遅え」

腕を払い胸倉を掴んで引き込み、足を払う。ついでにあごに蹴りを入れて気絶させる。

俺がエヴァ相手に何回投げられたと思ってんだ。

「ああっ！？ 山ちゃんがやられたっ！？」

「なんだとっ！？ あいつか、やっちまえ！」

「俺ただの通りすがりだからっ！？」

「やり返した時点で君も当事者だろうに」

俺の言葉は暴走した柔道部員（仮）には届かず、何か喚き立てながら向かってくる。

仕方ないと覚悟を決めて、腰を落として迎え撃とうとした時。

視界の端に微かな違和感を覚えて、後ろへ跳んだ。

何かがあごを掠め通り過ぎる。

「うあ……?」

「あ……?」

目の前で倒れていく男たち。

彼らも何があつたか分からないような顔をしていた。
すぐさま違和感の方を見る。

「げ、高畑……」

一番嫌な広域指導員が来てしまったようである。
眼鏡に白いスーツ、ポケットに手をつ突っ込んでいるその姿はまぎれもなく死の眼鏡である。
デスメガネ

「元気があるのは良いことだけど、人に迷惑をかけたなら駄目だよ」

「デスメガネだ！ 今日こそ勝つてやるぜ！」

「全員突撃ーっ！」

上手い具合に喧嘩してた奴らが高畑の方へと行ってくれた。

頑張つて囷になってくれ。その間に俺は逃げる。

あ、全員膝から崩れ落ちた。

高畑はそのままこちらを向く。

パンツ、と音は軽く。しかし十分な重さの衝撃があごを守っていた
腕を襲った。

腕を上げたつもりはなかったんだが、不味いと思うよりも先に体が
動いたらしい。

「お？」

やべ、興味持たれなくさい。

しかしまあ、久しぶりに高畑を見たけれど段違いに光を纏ってるな。今ならその違いがよく分かるわ。

「うちの生徒はすごいな！。防ぐ子も出てきたか」

顔は笑ってるけどなんか怖いぞ、あんた！

あと俺無関係だから！

巻き込まれた一般人だから！

叫ぼうと思ったがポケットから手を出さない姿を見て止めた。

キュキュ、と一際高い風を切る音と同時に衝撃が2回。

音速近い速さの拳大のなにか。意味が分からねえ。

眼のおかげか、出所も分かったしおそらく直線的にしか撃てないと思うがそれからどうすればいいのか。

いつのまにか高畑攻略になっているが、まあ構わんだろう。

俺も何回か指導されてるからな。

踏み込もうと力を入れて、

「高畑先生、それくらいにして下さい」

マコトの声で止められた。

「ええっと、火之川君、だったかな」

「はい。それとは友人で、今回の騒動には巻き込まただけですの
で」

知り合いなのか。

それならもう少し早く止めて欲しかったんだが。
あとさりげなくそれって言うんじゃないかねえ。

「そうだったのか、悪かったよ」

「はい、それでは失礼します」

マコトが礼をしてその場から離れようとするので、一緒に離れようとする。

「ああ、ちょっと。君の名前を覚えてくれるかな？」

呼びとめられた。

いいだろ、俺の名前なんて！

さっさとその伸びてる奴らを連れて行けよ！

「……神無です」

と、まあそんなことを先生に向かって言えるわけもなく、嫌々ながら言うのだが。

「そうか。覚えておくよ」

覚えておかなくていいです。今すぐ忘れてください。
言いたい。いや、もう本当に。

「いえ、それじゃあ……」

無難な言葉しか返さないが。
なんであの高畑なんぞに眼をつけれなきゃいけないのか。

くそう、厄日だ。

「高畑先生のアレを避けるだなんて、すごいじゃないか」

マコトがあまり触れたくない話を振ってくる。

それに避けたのは最初の1発だけだし、それもマグレなんだが。

「マグレだマグレ。次は避けられん」

「それでも、だ。中々に格好良かったぞ？」

まるで嬉しくねえ。

「そっぴゃ、高畑と知り合いなのか？」

「ほとんど顔見知り程度だ。学園長に用があつたときに案内してもらったことがある」

へえ。

さして興味もないが、あの人ちゃんと仕事してたんだな。
てつきり広域指導員を名乗って不良たちをボコボコにするだけの簡単なお仕事かと。

「あの人は女子中等部の英語教員だよ」

「うわ、まるで想像できねえ」

女子生徒相手ににこやかに授業をする高畑とかないわ。

考えただけでも鳥肌が。

などと下らない話をしていると後ろから声を掛けられた。

「さつきは見事だったじゃないか、悠斗」

「お、エヴァ。こんにちは、茶々丸さん、チャチャゼロ」

「こんにちは、悠斗さん」

「ヨウ、楽シソウダッタジャネエカ」

律儀に腰を折り曲げて挨拶を返してくれる茶々丸さん。

それとチャチャゼロ、楽しくないから。

ケケケと笑うチャチャゼロはもう置いておこう。

それにしても見事だったってことは、見てたのか。

「危険察知と意識外からの攻撃への対処。随分と体が動くようになったじゃないか」

「そりゃまあ、エヴァに散々似たようなことされたからなあ……」

休憩中に氷の矢がいったいいくつ飛んで来たことか。

危険察知の訓練とか称して目隠しさせられてチャチャゼロから逃げるとか。

逃げ遅れて腕を斬り離された時もあったなー。

一人心中で泣いているとマコトが居心地悪そうにエヴァを見ていた。

「ええと、ユート。その少女とどういう関係だ？」

「フン、白々しい。貴様が私を、いや悠斗と私を監視していた魔法使いだろう？」

ピシリ、と空気が冷える。

エヴァは意地の悪い笑みを浮かべて、マコトは怒気を含めた笑みを浮かべて。

あー、監視ってこいつのことか。

自分の肩に乗っている淡い赤い光を纏った手のひらサイズの少女（？）を見ながら思う。

思えばこの子が見え始めたのは最初にエヴァの別荘に行く前の、マコトに肩を叩かれたあたりからだっただけかな。

「……それでは、どうも初めまして。火之川です、闇の福音さん？」
ダークエヴァンジェル

「ハッ、神成のお付きがまだいるとはな。次期頭首に価値は見出せたか？」

ああ、エヴァがまた俺には分らんことを。

神無は色々とやらかしすぎだろ。なんだよお付きって。

あと2人共怖いから。

「残念ながら、私は火之川や神無のためにユートの隣にいるわけではないのでね」

「そうか、なら自分が魔法使いだということを教えてやってもよかったんじゃないか？」

いや、別にマコトが魔法使いだろうがそっじゃなかりうが付き合い方は変えないし。

ほけーっと2人のやりとりを見ているとチャチャゼロが軽い身のこなしで肩まで昇って来た。

「モテモテジャーナール」

「あー、うん。嬉しい、のか？」

正直微妙なところである。

というか、こんな往来の場で魔法だなんだって喋っていいのか？
一般の人にバレたらオコジョにされるんじゃないかな？
とはいえ、周りに不自然なほど人がいないからいいんだろうか。

「そういえばエヴァがこんな時間に出歩いてるだなんて珍しいな」

「貯蔵していたお酒が少なくなったので買い足しに、とのことですよ」

いや、見た目的に買えないだろう。

それともなにか。お父さんのおつかい、とでも言うのか。

……あのエヴァが？

ないな。これだけはもうはっきりと言える。

そんなことを言うくらいなら素直に金はあるから買わせろという人間だ。吸血鬼か。まあいい。

馬鹿なことを考えているうちに悪友と魔法の先生の口論はどんどん加熱していく。

「あなたのようなチンチクリンにユートは渡さん！」

「ええい、誰がチンチクリンだ！　だいたい男か女か分からん格好をして！」

訂正。ただの口喧嘩になっていた。

喧嘩するほど仲が良かったことなんだろうか。そういう雰囲気ではないか。

しかしエヴァ。マコトが男か女か分からないって、どうなんだ。普通の格好じゃないか。

そりゃあ確かに男にしちゃ線が少し細いし綺麗な顔してるけど、そんな女に間違えられるほど柔じゃないし、なにより男子校に通ってるわけだし。

「このガキめ……。ここで永遠に眠らせてやるつか」

「それはこちらの台詞だ、闇の福音。ユートの手前、使つのは憚られるが消し炭にしてしまってもかまわんだろっ」

いきなり物騒な話になってやがる!?

「ストップ！ こんな所で争わないでくれ！」

慌てて2人の間に入って止める。

なんだってこんなに血の氣が多いんだか。

エヴァはともかくとして、マコトはこんなに率先して争うようなやつではないのに。

「む、しかしユートよ」

「しかし何も無いっつの！」

「フン、まあ弟子の頼みだ。見逃してやるとしよう」

「力を封印されている吸血鬼風情が何を言っている」

そう言つてニヤリと笑うエヴァとマコト。

なにこいつら、犬猿の仲とかそういうレベルじゃねえぞ。

「ドウデモイイカラサツサト酒買イニ行コウゼ、御主人」

争わないと分かった時点で興ざめしているチャチャゼロがさつさと用事を済まそうと進言する。

その言葉は俺にとっては嬉しいものだがエヴァにとっては些か不服であるようだ。

エヴァが顔を顰^{しか}めてマコトを見ている。

「さつさと言ったらどうだ、エヴァンジェリンちゃん？」

「よし、死ネ」

エヴァの宣言と共にその手に収束された魔力が敵を喰^ヌらい尽くさんと明確な殺意を持って放たれる。

俺程度では何が出来るわけでもないが考えるよりも先に体が動いた。

「氷盾！」

俺が作り出した氷の盾は、エヴァが放ったただ圧縮された魔力の前でも僅かにその威力を抑えることしか出来なかった。

しかしマコトはそれすらも必要ないくらいに魔力を込めて障壁を張っていた。

魔力が弾けるとき特有の音を立てながら障壁が軋む、がそれだけだ。所々罅が入っているが深刻なダメージではない。

「チツ、やはりまだ足らんか……」

「驚いた、これほどまで力が戻っていたのか」

エヴァは残念そうな、マコトは純粹に驚きの表情を浮かべる。
今日までに1本しかエヴァの鎖を外すことが出来なかった。
それでも十分だ、と言ってくれるのだが世話になってる手前なんとかしてやりたいと思う。

「もうちょい仲良くしろよ……」

「喧嘩を売ってきたのは彼女の方だぞ？」

「事実を言っただけだ。ああ、それと悠斗。試したいものがある。
夜で良いから来い」

「はいよ」

マコトが睨むがエヴァは涼しい顔である。
一通り言って満足したのかエヴァは茶々丸さんとチャチャゼロを連れて商店街の方へと向かって行った。

「ユート」

エヴァたちの姿が見えなくなってようやくマコトは口を開いた。

「私はある人たちに頼まれてユートを監視していた。ユートが魔法に関わらないようにね。……軽蔑するかね」

「なぜそうなる」

その繋がり分らん。

魔法と言うのは秘匿すべきものだとエヴァから聞いた。
自分で言うのもなんだが、疑わしいなら監視でもなんでもすべきじ

やないのか？

そう言ってみるがマコトは首を横に振った。

「違う、最近のことじゃないんだ。私がユートを監視し始めたのは……、10年以上前だ」

「あー……、ってことは出会ってすぐか」

ようするに10年間騙し続けてきたことに対してどう思うか、と。くだらねえ。

「もし、俺とお前の立場が逆だったとして、お前は俺を軽蔑するか？」

「ありえないな」

即答かよ。

それはそれで不安になるが……。

「まあ、それが答えだ。俺とお前じゃそこに行きつくまでの過程は違うだろうがな」

そう言っつて肩を竦めて見せる。

多分監視の理由は神無だから、という事なんだろうがどうでもいい。

「さっきお前が言っつてたじゃねえか。火之川や神無のためじゃないっつて」

マコトが言っつならそうなんだろう。

俺としてはそれで十分だ。

「……はあ」

「なぜ溜め息を吐く」

「いや、私も大概だがユートもこれほどとは」

「どういう意味だ、それは。」

「まあ、いい。私の一番の心配事は無くなったからな」

「お前に心配事なんてあったのか……」

「ははっ、こやつめ」

俺の横っ腹に鮮やかなボディブローが決まる。
とりあえず全力でデコピンしておく。

ああ、いつも通りだ。

これも、いつからやっているんだろうか。

「まあ、なんだ。一応先輩だから魔法のことで分からないことがあれば聞いてくれ。あまり必要なさそうだがね」

エヴァが俺の師匠であるだろうということを考えての発言だろう。
確かに、エヴァに魔法使いとしての基礎知識から教えこまれているから、あまり聞くことはない。

とはいえまだまだ勉強不足な感じが否めないが。

「そついえば神無のお付きっで？」

「言葉通りだ。昔は神を成すという字を書いたということは知っているか？ 火之川はその時代から付き人のような存在なのだよ。家来と言い換えてもいいがね」

他にもいくつか同じような家系はあったのだがね、とマコトが肩を竦めながら言う。

「“神成”が“神無”になると掌を返したように離れて行ったという話だ。かくいう火之川も同じなんだがね。今ここで私がこうやってユートと一緒にいるのは本当に偶然なんだ」

「……神無は一体どこまでやってたんだか」

神成の時代と言うくらいだから随分昔の話なんだろうが、家来を持てるほど偉かったとはね。
今は見る影もないがな。

「何、気にすることはない。ユートはユートだ」

「そら分かってるけどな」

考えても仕方のないことというのは分かるが、こつも神無の名前が出る俺が俺じゃないような気がしてしょうがない。

いや、それも考えてもどうしようもないのだが。

他人の色眼鏡なんぞどうしようもないしな。

「ほら、買い物に付き合ってくれるんだろう？ だいぶ時間を取られたからな。早く行こう」

「はいよ」

小走りで先に行くマコトに付いていく。

こういう時のマコトはだいたい機嫌が良い。

マコトの悩みも無くなったって言うし、今はこれでいいか。

あとはエヴァとマコトがもう少し仲良くしてくれればいいんだけど

……。

まあ、なんとかなる。……とりたい。

7 時間目 トラブルだらけの外出（後書き）

現時点での主人公は麻帆良祭でネギが闘ったタカミチには勝てないくらいの強さ

向かい合って闘い始めれば5分持たないくらいです

一応、悠斗の強さを勘違いするかも知れないのでここに書いておくと思います

補足無しでもいいように、これからも精進したいと思います

8 時間目 とある生徒の初キッス

服や小物を見ていたがめばしい物は無かったようで何も買っていなかった。

散々冷やかashiをして、ファストフード店で軽く食べて別れる。解放されたのは日が暮れてからだった。

「で、試したいことって？」

「これだ」

南国のリゾート地のようなエヴァの別荘。そこでの魔法修行の休憩中に聞いてみる。

エヴァが持ってきたのは無色透明の小さな宝石だった。だけど、ただの宝石にしてはそれの中に入っている魔力が多すぎると思うんだが。

「器はただの宝石だが、中身は高純度の魔力の塊だ」

「ふーん」

エヴァが以前使ってた液体の触媒と似たようなものだろうか。こっちの方が桁違いに良い物なんだろうけど。

「つまり大容量の魔力保管装置みたいなものか」

「宝石が昔から魔よけの道具として使われているのはそういう一面があるからだ」

で、これをどうすればいいんだろうか。

「作れ」

「無茶言うな」

この幼女（偽）は何を言っているんだろうか。
というかそういう物は特殊な作り方とかなないと無理なんじゃないの？

「なに、簡単に言えば少し精霊達に力を貸してもらって宝石に込めればいいだけだ」

「ちゃんと言うと？」

「出来るだけ自然に近い魔力の溜まり場を作ってそれを出来るだけ長く維持すればいい」

「……出来るだけ長くつてのは？」

「毎日12時間休憩無しでやって2、3ヶ月で出来れば早い方じゃないか？ 詳しくは知らん」

「ご自分で頑張ってください、さようなら」

即座に180度反転して走り出す。
しかし まわりこまれて しまった！

あごを指先で軽く支えられ、ゆっくりと顔を近づけてくる。

あと数センチ、というところで止まり瑞々しい唇を開く。

少女の姿とは思えないほどに、その姿は艶め^{なま}かしく、人を狂わせるほどの魅力を持っていた。

「私じゃ出来んからお前にこうして“お願い”しているんだろうが」

吐息がかかる。

微かに笑う少女の腕と腰にそつと手を当て――

「そおい」

放り投げる。

「何がお願いだ。そんなことを言うなら魅了の魔法なんぞ使っんじやない」

「チツ、日に日に耐性が付いてきてるな」

そりやもう何度も引つかかってますから。

とはいえ今回も危なかった。もう少しで従順な下僕^{ペット}になるところだった。

生憎と幼女のペットになる気はない。

「で、どうやってやればいいんだ？」

「切り替えの早いヤツめ……。下の部屋をひとつ儀式場にした。やるときは私の指示に従ってくれればいい」

「了解」

エヴァに促され階下へと降りる。

「ここだ」

「これはまた……、前の俺だったら5分ここにいられるか分からん」

案内された部屋には魔力が充満していて色鮮やか、というよりも混沌とした色合いである。

今はエヴァに言われてフィルターのようなものを意識的にかけて見辛くしているが、それでも分かるほどだ。

「これに魔力が入るように流れを作ればいい」

そう言つて部屋の中央にある台座らしきところに小さな宝石ダイヤを置いた。

さて、魔力の流れ、ね。

とりあえず試してみないことには始まらない。

「精霊さん精霊さん、この宝石の中に魔力を入れて頂けないでしょうか？」

眼のフィルターを外して呼びかける。

俺が精霊と呼んでいるのはマコトが俺に付けていた小さな少女らしきものたちのことである。

どうやらあの生き物(?)はそれ自体が属性の魔力の塊みたいなものらしい。

精霊に力を借りることが出来るのに気がついたのは、マコトの精霊が偶然にも俺の言葉に反応するのを見たからだ。

言葉が通じれば無視さえされない限りは意思疎通が出来るから、後

は簡単だった。

エヴァに少し高位の精霊を呼んでもらい、話をして、色々条件付きで力を貸してもらっている。

部屋に充満してただそこにあるだけだった魔力の一部が指向性を持ち始めた。

「ん、ぐ……」

30分経ったのか1時間経ったのか。

それともまだ5分くらいなのか。

脳が眼の奥のガリガリと削られる様な痛みを訴えている。

「よし、そこまで！」

「っ、だあっ！」

っ、辛い……。

魔力の多い場所や人は眼の毒にしかならんな。

精霊に魔力を渡してるのもあってガス欠状態だし、こりゃヤバイ。

「む、まだ倒れないか。限界ぎりぎりまで絞ったつもりだったが
前の成長速度が上回ったな。とはいえ魔力容量なんてものはそう簡単
に増えないはずなんだが……」

「正直倒れた方が良かったと後悔している」

頭痛い、気持ち悪い、体だるいの3コンボだよ。

「そうだな、御苦労だった。今は休め。『眠りの霧』」

ん、強制的に眠らせる魔法だったか。
それに抗わずに、意識を落とした。

——ユート、遊ぼう！

——いいよ、何する？

懐かしい記憶だ。

マコトと会ってすぐぐらいのものだろう。

——えっとね、魔法使いごっこ！

眠っていて意識だけの俺がボブツ、と変な音を立てて吹いた。
こいつこんなこと言ってたんだ。
昔の俺が困ってるぞ、昔のマコトよ。

——……？

——これ持って！

俺が渡されたのは先端に月の飾りが付いている小さな棒。
初心者用の、魔法の杖。

——えっとね、プラクテ・ビギ・ナル　アールデスカット、はい言
って！

——？　プラクテー・ビギナルー　アールデスカット。

勿論”俺”に使えるはずもない。
何の事だか分かってない”俺”も、自分だけでなく出来るものだと

思っていたであろう”マコト”も2人揃って首を傾げている。

——何も起こらんよ？

——おかしいなあ。プラクテ・ビギ・ナル　アールデスカット。

”マコト”が唱える。いとも簡単に火が点いた。

——おお、すごいね！

——でしょ！　ユートも出来ると思ったんだけどな……。

——うーん、まあいいよ。で、他に何か出来ないの！？

子供つてのは純粹でいいねえ。見てるのは”俺”だからそんなこと
思うのはなんか気持ち悪いけど。

——練習中だから、これしか分からないんだ。ごめんね。

——そっか。じゃあ他のことも出来るようになったら見せてね！

——うん、約束する。必ず、ユートに——

暗転。

眼を開けて、眼に入っただのは白い天井だった。

エヴァの家にはこんな部屋は無いからまだ別荘の中の様だ。

何より気温がまるで違うしな。

外は12月、こっちは6月並みと、気温の変化で身体が参るんじゃないかと思ったほどだ。

「起きていましたか」

「ああ、茶々丸さん。何時間くらい寝てたかな？」

「おおよそ4時間ほどです」

4時間もか。

通りで体が軽い筈だ。

「調子が悪くないようであれば私のところに来るように、とマスタ―が」

「了解、どうせ上でチャチャゼロと酒盛りだろ」

調子は悪くない。

というか逆に良すぎて1周回って悪いような。

眼のフィルターが機能しているにもかかわらず所々に赤や青の光が見える。

エヴァに相談したほうがいいか。

「おー、随分と高そうな酒飲んでんな」

「起キタ力。マア飲メ」

やけに高そうな一升瓶に入った日本酒を注いだグラスをチャチャゼロから手渡される。

……臭いがなあ。

アルコールの弱いものなら1杯くらいチビチビと飲むが、こう強い酒はちよつと。

口を付けてみれば案の定、口いっぱいどころか鼻の奥まで広がる独特の香り。

「うん、飲めねえ」

「ダラシネエナ」

「ワインにするか？　少しは飲めるだろ」

「お前ら言つとくが、俺は未成年だからな！？」

「誰にばれる心配もないんだ。それにああいうのは人様に迷惑かけなければ良いんだよ」

「健康の障害云々は！？」

「そんなもの魔法でどうにでもしてやる。飲め」

「……頂きます、ボス」

結局折れた。口での勝負で勝った事など1度もない。毎回言い包められてしまう。

「そついや眼のフィルター掛かってんのに精霊が見えるんだけど、どういうことだと思っ？」

「なに？　少し見せてみる」

エヴァの前に座ってじつと眼を見つめる。

普段なら顔が近すぎるなどと思うくらい距離だが、気分的には眼科のそれと一緒になので気にならない。

エヴァも同じだろう。

「……魔力に当てられて一時的に眼が活性化したか、もしくは頭が完璧にそういった類のものを認識してしまったかだな」

エヴァは少し考えたそぶりを見せ、口を開いた。
活性化か、認識か。

「何か不味い事は？」

「ない。慣れないうちは頭痛やらがあるだろうがどうせすぐに慣れるだろ」

「ああ、そう？ 一応強めのフィルター掛けたいんだけど」

「……言われたままにやるのは癪だな。暗いところで光るようにしてやろうか」

「ぼそつと恐ろしいこと言うんじゃないやねえよ」

この少女（偽）は何を言っているんだ。
そんなに俺を改造したいのか。
眼が光るって、猫か。

しかし、ここでこうやって馬鹿やるのも3ヶ月か。随分と密度の濃い3ヶ月間だった。

それにしても修行の内容がエヴァとチャチャゼロに殺されかけるものしか覚えてないのはどういうことだろうか。

あ、そのあと茶々丸さんに看病されたのはいい思い出です。

「良い思い出バカリだな」

「腕一本持つてかれる思い出なんて欲しくなかったわ!」

いつもよりも大きい声で笑うチャチャゼロ。酔っているんだろうか。こう言っちゃあなんだが俺のどこが好かれてるのかさっぱり分からん。

「しかしお前はよく頑張ってるほうだと思う。あれだけやられていたら発狂してもおかしくないんだがな」

「……慣れ、かねえ?」

嫌な慣れだ。

腕から先が無くなっててもいつものことか、で済ませられるようになっていたのに気づいたときは本気で恐ろしかった。

「そんなお前に私からの餞別だ。ありがたく受け取れ」

珍しい。エヴァは基本甘やかさないからこついうこともほとんど無いんだが。

何を貰えるのかとちょっと期待しながら待っているといきなり顔を強く引き寄せられた。

近づく顔。

触れる唇。

あ、酒の臭い。

その行為を何と認識するよりも先に地面から光が溢れた。

「%\$#&#\$%\$#%\$#&#%\$#!?」

「生娘じゃあるまいしキスごときで騒ぐな馬鹿者。ああ、初めてだったか。それは悪かったな」

くそう、言つてはならんことをベラベラと。

どう言い返したものと悩んでエヴァのにやけた顔を覗き込んでみるとほんのりと赤みがかっていた。

……どっちだ？

これは酒の所為で顔が赤いのか、それとも恥ずかしくて顔が赤いのか。

確かめる方法としては――

「ソオイ」

「はっ？ んぐっ」

背中を強く押され体が前のめりになり、ガチリとエヴァの顔に俺の顔がぶつかった。
痛え。

そのまま数瞬。

まるで茹で上がるようにエヴァの顔が真っ赤に染まっていく。
ああ、一応恥ずかしかったんだと思った次の瞬間には体が地面を転がっていた。

「な、なななな何をする貴様あーっ!？」

しこたま頭を打ち付けたらしい。フラフラする。

「キスごときで、なんて言ってたんだから気にするなよ。事故だし」

「いきなりされるとは思ってもないだろうが!」

なんだかごちゃごちゃ言っているが、つまり自分はいいがお前は駄目だってことだね。

どこぞのガキ大将か。

そして俺を押したのであろうチャチャゼロに冷ややかな視線を向けるが本人はどこ吹く風と言わんばかりにそっぽを向いてグラスを啣^{あお}っている。

あの野郎、あとで覚えておけよ。

「ふん、まあいい。ほれ」

「？　なんだこりゃ」

「^{バクティオー}仮契約カードだ。魔法使いの従者のためのな」

掌サイズのカードを渡された。

鈍色の腕輪を左腕につけていくらかの精霊を従えた俺の姿が描かれている。

え、いやまじでなんだこれ。

こんなの持ってたらナルシストまっしぐらじゃん。

しかも決めポーズではないけど妙にキリッとした顔をしていてむかつく。俺だけど。

「”神へと挑む愚者”、か。なかなか皮肉が利いているじゃないか」

「神無が神へと挑むってか、馬鹿らしい」

厨二病臭いと思ったことは秘密である。

「徳性は勇氣、方位は中央、星辰性は月、色調は灰。アーティファクトは降魔の腕輪」

「アーティファクト？」

「仮契約をした時にもらえる魔法道具だ。必ずという訳ではないがな」

降魔の腕輪ねえ。十中八九カードで俺の左腕に着けている輪っかのことなんだろうが。

「アーティファクトを呼び出すときは来たれ、戻すときは去れだ」
アデアット アヘアット

「日本語をお願いします」

どうせラテン語じゃあなんにも起こらないだろうからな！

「適当に來いとかでいいんじゃないか？」

「うし、……來い！」

手に持ったカードを掲げ、強く念じる。

言葉として発するのはそれ自体が力を持っているから。

イメージを強固に、より現実^ニに固めるため、と解釈した。

カードから光が溢れ、魔力が勢い良く漏れ出す。

と、次の瞬間にはカードは腕輪へと変わっていた。

「こりゃまた地味ーな」

「うん？ なら金銀財宝で装飾してみるか？ なに、暗闇の中でも輝くくらいにはしてやるぞ？」

「遠慮させていただきます」

さて、この腕輪だけど装飾もなにもなく、なんの為にあるのか分からない。

「どう使った？」

「さて、説明書のようなものはないしな」

手詰まりじゃねえか。

まあ武器のように使うものじゃないってのは分かるが、それにしたってなあ。

降魔の腕輪。降魔、魔を降ろす。うーん？

「まあ、いいか。取り急ぎ必要なものでもないし」

「案外簡単に分かるかも知れんしな」

「刃物ダツタラ分カリヤスカツタノニナ」

チャチャゼロの言うとおりである。

剣とか、槍とか、そういうすぐに分かるような物だったら良かったんだが。

はあ、前途多難すぎる。

自分が持つてる道具の使い方が分からないだなんて馬鹿らしい。

「ところでなんでキスなんだよ」

「私が知るか。今の仮契約のシステムを作った魔法使いに言え」

「さよけ」

役得、で済ませていいんだろうか。
見た目少女のエヴァだから、ちょっと後ろめたい気持ちひしひしと……。

「おい、なにか失礼なこと考えてるだろ」

「いや？ ソンナコトハナイデスヨ」

棒読みになってしまったが、エヴァはそれ以上追及することなく話を切ってくれた。

「ところで悠斗、明日の夜は暇か？」

「ああ、まあ何も無いけど」

「よし、その日の修行は無しでいい。11時ごろに家に来い」

お、休みか。

久しぶりの休みだな。

久しぶりって言っても1日が2日になってるから実際はしっかり休んでるんだけど。

チビリと、口を付けていなかったグラスを少しだけ傾ける。美味しくない。

鈍い輝きを放つ腕輪が眼に入った。

なんとなく、こちらに向けてメッセージを送っているように感じ取れる。

気のせいかも知れないが、九十九神という例もある。

うん、まあ。

「よろしく頼むぜ、相棒」

腕輪は応えるように鈍い光を反射した。

9 時間目 初めての实战

さて、昨日エヴァに言われたとおりによつて来たわけだが、なぜかエヴァたちに連れられて森の中を進んでいた。説明もなしに拉致られても困惑するだけなんだが。

「よし、ここだ」

そう言つてエヴァは立ち止まった。

そこはちよつとした広場のようになっていて、月明かりも差し込むほどだった。

「で、なにすりゃいいんだ？」

「まあ待て。すぐに分かる」

分かるつて言つたつて、こんな何も無い森の中で一体何をしろつて……。

「……ああ、そういうことか」

そういえばこんな場面を俺は前に見たことがあつたわ。夜中の、森の中で、魔法使いが踊っていたんだつたな――

「なんでえ、誰かと思えば子供じゃねえか」

「おう、ボーズ。もう寝てなきゃいけねえ時間だぜ」

この、鬼たちと。

「悠斗。侵入者だ、やれ」

あっさりと言ってくれるがこっちだって心の準備というか、いやむしろちゃんと言っておけよとも思うんだが、まあそれはそれとして

「1つ質問。人間でいう致命傷を受けた場合、あいつらってどうなの？」

少しだけ気がかりな部分はそこだ。

魔法を扱うということを重点的にやっていたから知識の方はさっぱりである。

勉強したくねえなあ……。

「安心しろ、普通の方法では死んだりせん」

「そうか、よかった」

”普通の方法”がどこまでを指すのかは分からないが、俺ごときでは無理な方法だろう。

気にしないことにしよう。

エヴァたちよりも1歩、鬼たちに歩み寄る。

「わざわざ待ってくれて、すまんね」

「何、我らは別働隊なのでな。暴れろ、としか命令されてない故、なるべくなら楽しみたいというわけだ」

「さよけ」

本命は別なのね。

まあ俺には関係ないけれど。

デスメカネ
どうせ高畑とか神多羅木さんとか葛葉さんやらに潰されるだろうし。

「そいじゃ、胸を借りるつもりで。……戦いの歌」

「来るがいい」

自身の身体能力を魔力で強化してざっと見渡す。

大小様々な鬼たち。数は20弱。彼我の距離は最短で約7メートル。あつて無いような距離だな。

小さく息を吸って、息を吐き出すと同時に地を蹴った。

先手はこちら。

一番近くにいた一つ目の鬼の懷に潜り込み下から掬う様に掌底。

その体が軽く浮いたことを確認して周りを巻き込むように調整して回し蹴りを叩き込む。

これで少しの間だけ一斉に襲われるということは無くなった。

「ふんっ！」

石で造られた棍棒を大上段から振り下ろす大鬼。

反射的に横へ跳び、ついでに着地点近くにいた小鬼を殴り飛ばす。

しかし思ったよりもダメージがないようで、すぐさま手に持った槍を振り回してきた。

体を屈め、一旦どの鬼からも離れる様に間合いの外へ。

流石に身体能力強化だけじゃどうしようもないわな。

——行きますか。

「雷の精霊よ。力を貸してくださいな、っと。雷の7矢・待機」

この呼びかけは間抜けにも程があるな。

もう少し考えておくべきだったか。

ジジジ、と壊れた機械のような音を立てながら現れる7つの球体を、体に追従するよう命令しておく。

「珍しい術やな。西洋魔術と同じモンなのに、唱える言の葉は現代のそれ。今までに見たことない術や」

「そりやどうも。俺にだって分からんよ」

小鬼の身長の倍はある槍の突きを左手で逸らし、一息に詰め寄り雷の矢を纏った右手で掌打を放つ。

雷撃。

煙となって消えていく鬼。

対象の消滅を確認。次へと移る。

肘打、裏拳、蹴り上げ、当て身。

囲まれているこの状況で足を止めることはそのまま負けを意味していると言っている。

「爆ぜろっ！」

膨れ上がり辺り一面にエネルギーを放出する雷球。

元々魔法の矢の1本なので威力は無いが、目くらましくらいには使える。

「火精召喚5柱、戦乙女よ、奔れ！」

その隙に下級火精を召喚。

剣と槍を持った戦乙女の姿に固定して遊撃させて自らも走り出す。

「光の3矢・収束！」

大きな目の鬼に飛び掛り、蹴りと共に首に魔法の矢を叩き込む。矢が弾け、煙が上がるが鬼が消える様子は無い。やべっ、威力足らなかった。

手を伸ばされる。胸を蹴り、腕の範囲の外へ。即座に振り抜かれる棍棒。

風の力で体を浮かして捻り、ぎりぎりで避ける。

「……背中、がら空きだぜ？」

鬼の腹から赤い刃が突き出る。

消える鬼の後ろには先程召喚した火精の1人がいた。

「すまん、ありがとう」

小さく礼を言うのと薄っすらと微笑んで消えていった。

他の火精も消えてしまつて魔力の残滓が残っているだけだ。

移動するにしても何するにしても魔力を消費するが、いくらなんでも効果時間が短すぎる……。

要練習つと。

思考を切り替え魔力を練り上げ周囲の確認。

「風の3矢・捕縛！ 火の1矢！」

殴りかかつてきていた鬼を縛り上げ、全力で顔をぶん殴る。

消えていく鬼の後ろに隠れていた狐面の鬼に足を払われ、投具で服の腕を地面に縫い付けられてしまった。

倒された俺を見て絶好の機会と思つたのか数体の鬼が一斉に手に持った獲物を振り下ろす。

「風盾！」

風の障壁に遮られる攻撃。

つつても壊れそうだから次の手を打たないとあかん。

——まあ、倒れたときに仕込んでるのだけれど。

青い光が地面から溢れ、鬼の足元から這い上がる。

「——白夜の国の、凍牙と氷土を。こおる大地っ！」

脚が凍り、鬼たちが動けなくなつた隙に投具を抜き離脱。
まとめて固まつてくれているんだから、全力で——

「来たれ氷精、爆ぜよ風精。氷爆！」

打ち碎いてやろうじゃないか。

魔力そんなに多くないから一撃一殺がちょうどいいんだけど。
残りは4体。

襲い掛かってくる気配が無いので1度深呼吸でもしておこうか。
息を吸ったところで少しくらつとした。

どうやら自分が思っているよりもずっと消耗しているらしい。

「俺たちを残して全滅か」

「たった1人の小童こわっぱにやられるとは」

一方は3メートル弱の大鬼。

打撃部分が成人男性の胴回りほどの棍棒を担いでいる。

もう一方は鳥カラス、だろうか。

石で出来た大刀を手に提げている。

「おにーさん強いねえ」

「そこらの鬼よりよっぽど強い。ウチの婿に来て欲しいくらいやな」

狐と猫の面を被った女の鬼が口を開いた。

というか見るからに鬼なのはともかく烏の人や彼女らは鬼って区別でいいんだろうか。

妖怪とかだったりしたらとても恥ずかしいんだが。

「先の奴らと同じに思っな！」

「うおっ！？」

間合いの外から伸びてくる突き。

体勢が崩れたところに入れてくる連撃。

まずい、踏んだ場数が違う。

足を踏み出せば打ち払われ、大刀を捌こうと腕を伸ばせば手首の返りで逸らされる。

簡易魔力障壁があるからって痛くないわけじゃないんだからな！

「こ、のっ！ 光の3矢！」

無理矢理体を後ろへと流して相手の間合いの外から魔法の矢を撃ちだす。

が、手元から離れた瞬間に爆発した。

「させまへんよ」

声を発したのはさっき俺をこかして地面に縫い付けてくれた狐面。

あんにやる、暗器が投具か、忍者みたいな奴だな。
爆発で一瞬。狐面を見て一瞬。
意識を戻したときには目の前に大刀が迫っていた。

「風盾！」

間一髪、風の盾で受け止める。

「それもあかんよー」

が、先程とは違う間延びした声とともにあっさりと破られる。

障壁破壊――！

それを認識したときには体は打ち据えられていた。

ふらつく視界。辛うじて見えたものは棍棒を振りかぶる大鬼の姿であつた。

彼女の弟子は蹴られたボールの様に吹き飛び、樹に叩きつけられた。
彼女はそれを横目で見て、何をするわけでもなく突っ立っていた。

「殺してへんやろな？」

「ありやもう死ぬ1歩手前うちゅうとこやな」

「力加減難しくてかなわんな」

彼女は苛立っていた。

「少女を𦣟^{なぶ}る様な趣味はない。引くのであれば某たちは見逃そう」

潰れたトマト1歩手前のような弟子を見て、溜息をひとつ。

この有様では死んではないにしても、当分は再起不能だろう。

少し力がついてきたので任せてみればこの様だ。

圧倒的に場数が足りていないのは当たり前だとしても、危険予測とその反射に関してはギリギリ及第点、それ以外は赤点もいいところである。

「ふ、フッフ、これは次からのメニューを倍以上に増やさなければならんということだな？」

「御主人、ソノ前二早ク何トカシナイト死ンジマウゼ？」

「脈拍、体温、共に低下。これ以上は危険です」

「む、ホレ」

彼女は念のために持つてきておいた治癒薬を従者に手渡す。

さて、目の前のこいつらはどうしてくれようかと考えたところで彼女は面倒になった。

「チャチャゼロ、やっていいぞ」

「面倒ダカラッテ押し付ケルナヨ。イイケドヨ」

彼女の1人目の従者に丸投げしたのである。

「ソレジャアマア、ナマス切りニデモ——？」

ジャラリとどこからともなく刃物を出して小さな掌の上で弄び、鬼に近付こうとしたが脚に何かが引っかかっていた。赤く染まった手。

「大人シクシトケ。死ヌゾ？」

「――」

チャチャゼロの主人の弟子――彼女にとっても良い遊び道具であり、友人でもあるのだが――が息も絶え絶えな様子で脚を掴んでいたのだ。

チャチャゼロも流石にこんな状態の男に鞭を打とうとは思わない。反応が返って来るから面白いのであって、黽りたい訳ではないし、なにより死んでもらっても困る。

だからこそ普段は言わない様な氣遣う言葉を言ってみたのだが、それでも手を放す気配は無かった。

「――」

青年は小さく何かを呟いている。チャチャゼロには聞き取れなかった。

腕を斬り放してでも行こうかと思ったところで、青年の体から魔力が溢れる。

「……治癒、力？」

「――っげほ、ごほ。ああ、死ぬかと思った」

体の半分以上が血に染まった青年は咳をし、肺に溜まった血を吐き出して、いつもと同じ様に声を上げたのだった。

いやー、まいったまいった。

走馬灯とか三途の川とか、あるもんだねえ。

流石の俺も少し覚悟しちゃったぜ。

「大丈夫、なのですか？」

「おーけーおーけー。問題ない」

茶々丸さんの心配そうな声に軽口を返す。

正直、痛みもあればそれを通り越して感覚のない部分もある。

「はあー。ははっ」

「この状況で笑うか、化け物め」

「ああ、笑うね。最強の魔法使い様の弟子として不甲斐なくて笑いと一緒に涙も出てくるよ。それと、化け物じゃなくてちよっと変わった魔法使いつてだけさ」

全員の位置関係を把握するためにぎっと辺りを見回す。

厄介なのはあの狐と猫、なのだが1人は木の枝の上、もう1人は大鬼の肩の上である。

俺の一挙一動を監視することができ、尚且つ俺を妨害できる位置にいる、ということ。

……もうちょい難易度下げてくれたってよくね？

「おい、次無様な姿を晒したら下着姿で麻帆良を10週だからな」

「それは俺に関わるお前の首も絞めることになると思うんだが……」

この前下着姿で走ってた男の人と歩いてるー、と言われるのは他でもないお前なのだから。

と、エヴァもその可能性に至ったらしい。
顔を赤くさせて唸っている。

「ヘマ打ツンジャーゾー」

「おお、2度目はないさ。――戦いの歌」

どこか気だるげなチャチャゼロの声援を背中に受けてもう1歩踏み出す。

1つ、2つ。

汗と血がべたつく。風呂に入りたい。

3つ、4つ。

というかもう疲れた。休ませてくれ。

5つ――。

「砂の5矢」

「させまへん」

魔法を発動させると同時に大鬼の肩に乗っていた狐面が投具を操り正確に全ての魔法の矢を貫いた。

砂の矢は形は崩れながらもなんとか魔法として成り立っている。

属性の特性みたいなものも色々あるな。やっぱり勉強しないと駄目

かねえ。

向かってくる烏に矢を適当に打ち込んで回避行動。

障壁張ったところで猫面に壊されるのだから魔力の無駄である。

素早いのと1発が強い前衛陣と妨害をする後衛陣。

バランスが取れてるって面倒なことこの上ないよな。

いつそのこと全員脳筋とかだったら簡単に勝てたかもしれないってのに。

「火の3矢」

左手を突き出してその周りに連続して魔力で出来た火の矢が現れる。

——と、あるものが視界に入ってきた。

降魔の腕輪。

鈍色に輝いていたそれは影も無く、水晶のように透明でその中に赤みが混ざったような輝きを放っていた。

……なんぞ？

全く気付かなかったがこの腕輪、少しずつ空気中から魔力を取り込んでるように見える。

「余所見とは随分と余裕だなっ！」

「っ！ わざわざ声を掛けてくれるアンタほどじゃない、ねっ！」

集中が途切れて火の矢が消えてしまった。いや、今はそんなことはいい。

横薙ぎに振るわれる大刀をしゃがんでかわし、後ろではなく前——つまり烏に体当たりをするように飛び込む。

衝撃。

しかしそれ以上は進まない。

「ふん！」

「ぎっ！？」

胸に膝が入る。

口から空気が漏れて耳障りな音となった。
体が浮いている。関係ない。

「——っ！ 収束・火の、3矢！」

「なっ、貴様っ！？」

烏が慌てて引き剥がそうとするが、させん。

狐面からも見えないよう俺と烏の影に魔法の矢を出す。

まずは、脚。

火球が間近で爆発する。想定していた威力よりも少しだけ強い気がする。

呻き声が聞こえた。

これで少しは楽になったか？

「ええいつ、離れろっ！」

「言われなくても！」

締め上げていた腕を緩めて突き放す。
顔の横スレスレを脚が通り過ぎる。

「はっはっは、先程までのキレがないなあ」

内心冷や汗ものだが軽口を叩く。

まあ言ったことは事実ではあるし、それが分かっているから向こうも微妙に顔を歪めているのだろう。

「1、2の、3！」

――違和感。

光の矢を1つを大鬼へ打ち出し、1つを枝に乗っている猫面へ。もう1つは烏の怪我している脚を狙うように。

ああもう、ようやく体が動くようになってきた。

思い出せ、エヴァとチャチャゼロ、茶々丸さんに追い詰められたときのことを。

あ、うん。余計なことまで思い出してきたから止めておこう。駆ける。

狙いは猫面。

1人離れていることから単独での戦闘力も高いとも考えられるが、その時はその時である。

「火の1矢！」

――違和感。

魔法の矢を腕に纏わせ体を弓なりに反らして飛び上がる。

猫面は胸元から札を取り出し障壁を展開させる。関係ない。

拮抗は一瞬。

拳は障壁を突き抜け猫面の額に直撃する。

そんなことは想定外で、消えずに残っていた猫面に衝突して纏れ合もっい、木の枝から落下した。

「お兄さん……、大胆やわ」

のんびりとした声が目の前から聞こえる。

顔が近い。

あと数センチというところに猫の面がある。

どうやら仰向けになっている猫面に俺が覆い被さっている形らしい。

「あかん、人と妖怪の禁断の恋やなんてっ！ あ、でもでもお兄さんなら嫌やあらへんかも……」

「……そおい」

とりあえず起き上がって、頬に手を当てて妄想している猫面に拳骨を落としておく。

多分妨害はしてこないだろう。

——さて。

「……随分と間抜けな」

「言わないでくれ……」

同情の視線を向ける烏に項垂うなだれながら言葉を返す。

「しかし、貴様が今の障壁を軽々と破ったことには驚かされた。……何をした？」

「俺にも分からん、ねっ！」

大刀を構えなおした烏に倒れたときに拾った石を顔に投げつける。烏は払いのけるまでもなく首を少しだけ傾けて避け、突進してくる。脚怪我してるってのにさっきまでとほぼ変わらない動きが出来るのは流石ってところだよな。
袈裟斬りか横薙ぎか突きか——。

ざっと剣の軌跡を予測して踏み込む。

「――雷の1矢」

――違和感。

見る。まだ動かない。

見る。まだ動かない。

見る――。横薙ぎっ！

左足を下にして地面を滑る。

髪の毛に何かが触れた、が、それだけ。

左手で強く地面を叩き体を持ち上げる。

狙いは、あこ！

パン、と乾いた音が響く。

「……見事だ」

「そりゃどうも」

崩れ落ちる体。

抱きとめる前に消えていつてしまった。

「……」

先程までも感じた違和感。

少しだけ魔法の威力が上がっているような気がする。

雷の1矢で倒しきれるとは考えておらず、痺れさせて追撃を入れる
予定だったんだけど。

思い当たるものとしては腕輪……、だろうか。

左腕に鎮座している腕輪は尚も透き通った輝きを見せている。

うーむ、魔力に反応しているのは分かったけど、それ以外はさっぱ

りだし。

魔力増幅装置みたいなものなんだろうか？
でも名前の意味がわからないし。

「時間がない、いかせてもらうで？」

大鬼の声で思考していた頭が切り替わる。
まだ2人いたんだっとな。
しかし、時間が無いってのは？

「ワシらを呼び出した術師が捕まったみたいでな、魔力が送られて来やせん。1発だけ付き合ってもらうぞ」

「そか、了解。——光の精霊、13柱。集い来たりて敵を討て。
…収束」

光の矢を腕に纏う。
棍棒を大上段に構える。
いや、こりや怖いわ。
ただでさえ図体でかくて威圧感があるってのに、あとは棍棒を振り下ろすだけの状態とか。
浅く息を吐く。

「ぜいやあつ！！」

気合と共に棍棒が振り下ろされる。
空気を割るような音を立てたそれは、一瞬で最高速度まで上がり襲い掛かってくる——

「風のつ、盾よあつ！」

持てる限りの魔力で障壁を編み、魔法の矢を纏った右拳を突き出す。2重3重に重ねた障壁はガラスが割れるような甲高い音を立てながら抜かれていく。

障壁がすべて抜かれ、突き出した左手に棍棒が触れるか触れないかという距離で右手に重い感触。頭をくしゃりと撫でられる。

「兄ちゃん強いな。機会があれば、また戦^やろうや」

「……おう」

わき腹が大きく抉れて、そこから煙を上げながら消えていく。

……悪い奴らではないんだろうなあ。

ただ今回は麻帆良に進入してくる術者に呼び出されたっただけで。

「ん、ほんならウチらはこのまま消えますわ」

「え？ あ、おう」

猫面を担いだ狐面がすぐ近くで声を上げた。

見れば2人の体もいたるところから煙が上がっている。

「そつやなー。次はお酒でも飲みたいなあ」

「ははっ、善処するよ」

狐面は手を振って消えていった。

後に残ったのは俺だけである。

大きく息を吐くと疲れからか脚に力が入らず倒れてしまった。

「……はあー、しんどい」

「しんどい、じゃないわ！ この戯^{たわ}けが！」

手をついて体を起こした俺の側頭部に衝撃が走る。
あかん、死ねる。

「なんだあの様は！ もっと上手く立ち回らんか、この愚図め！
大体——！」

エヴァが俺の頭を踏みながら何か言ってるけど、正直限界です。
とりあえず茶々丸さんは心配するだろうから適当に手を振って、そ
のまま意識を——。

10時間目 決闘！？

夢だ。

——よう、被検体の様子は？

——うーん、最近調子が悪いんだよなあ。

ぼんやりと浮かぶ景色。

白衣の男たちがガラスの向こうで話し合っている。

——飯も食わねえって話じゃねえか。

——そうなんだよ。実験とか言う前にあれの生命維持から始めないといけなくなるかもな。

——うへえ、これ以上仕事増やされて堪^{たま}るかっつての。

——仕方ないさ。流石に殺すわけにはいかないからね。

聴覚が異様に研ぎ澄まされているのか、会話は一言一句逃さず聞こえている。

それなりに疲れているのだろう。2人とも声のトーンが少しだけ低い。

——あのガキも運がねえなあ。自由と引き換えに得られるのは苦痛とちよつとばかりの才能っつてな。

——得られるんじゃないかって無理矢理与えられるんだけどね。

どうにも実験動物みたいな立場のようだ。

ボーっとしていると体に違和感を感じた。

熱いような痛いような……。

——ははっ、そりやそうだ。……おい、あのガキなんか様子がおかしくねえか？

——え？ ああ、自殺しようとしてるね。無駄だっていうのに。ほら、止められた。

白衣の男の1人の言葉が今まで聞いたことも無いくらいに冷たく聞こえて、体から発せられる違和感も忘れてゾツとした。

ここまで人間の声は冷たくなれるのか。
嫌悪だとか忌避だとかそういうものじゃなく、ただ只管に無関心な
声音。

同僚さんもこれでもかってくらいに引いてるぞー。

——……なんであれの体から勝手に火が出たんだ？

——詳しいことは知らないけど改造の副作用らしいよ？ 確か、魔法のリバウンドとかなんとか。

——才能どころかクソみてえなオマケがついてきたってか。笑えねえな。

——まあ、要するに——

「……………あー」

見慣れた白い天井に少し安堵した。

我ながら気の抜けた声を出していると思う。

夢の内容は所々抜けている部分もあるが結構はつきりと覚えている。夢というのは起きている時の記憶の整理だったか？

だがあんな感じのゲームや漫画も見えてないし、自分が受けたってこともない。

「まあ、いつか……」

夢は夢。そう結論付けて起き上がる。

体の所々から鈍い痛みを訴えてきているが、激しい運動などをしなければ支障はないだろう。

魔力は完全とは言える程ではないが十分に回復しているし、別段おかしい症状もない。

眼に力を入れてフィルタを外してみる。

赤や青、黄色に緑と彩り鮮やかな光球たちがふわふわと飛び回っている。

ん、これも大丈夫。

左腕にある腕輪は昨夜のような輝きはなく、鈍い色を放つだけであった。

体の調子が悪くないことを確認して安心したら、腹から食べ物を求める響きが聞こえた。

エヴァたちはいつもの如く上にいるんだろうか？

「あ、悠斗さん」

「起きたか」

階段を上がりきったところで声をかけられた。

予想通りいつものテラスに3人ともいた。

茶々丸さんが真っ先に気付き、それに反応して2人がこちらを向く。

「動き回レルノカヨ。丈夫ッテレベルジャーナ」

「^{スーパー}超大丈夫。鈍痛はあるけどな」

椅子に座り、テーブルに出ているエヴァのツマミらしきチーズを貰う。

一口齧^{かじ}る。

あかん、濃厚すぎる。

起きて一口目でこれは重過ぎる。

「人のものを勝手に食ってそんな顔をするんじゃない」

「いや、すまん……」

なんでもいいから腹に入れておきたかったのよ。

チーズを皿に戻して水を――、エヴァとチャチャゼロの席に水なんてあるわけなかった。

茶々丸さんをお願いして水を持ってきてもらう。

「まあいい。お前のアーティファクトで気付いたことがある」

「ほう」

透き通ったりするだけの装飾品じゃあないのか。

「その腕輪は魔力タンクの役割を果たしている。昨夜は透き通っていただろう？ 恐らくあれが魔力がいっぱいになった状態だな」

「へえ。俺が感じたのは魔法の威力が上がってたってことくらいだわ」

あれは魔力タンクによるブーストだったんだろうか？

だが後押しされるような感覚は無かったし、自力が上がったような感覚だったんだが。

「まあ多分魔力タンクもそれも何かの副産物だろうさ。何かというのはまだ分からないがな」

副産物ねえ。

つまりどういったものなのかはまだ分からないってことか。

使い方の分からない道具ほど何も出来ないものはないってのに、やだねえ。

「さて、昨夜の戦闘だが。まず相手が4体とはいえ咄嗟の判断が遅い！ 未知に対する考察など後でも出来る、まず体を動かせ！ それと最後！ 貴様は自殺志願者なのか！？ 真正面から行ってどうする！」

「耳が痛いわー……」

気付いたときにはもう遅いつて状況だったからな。

まあ最後のあれは向こうに合わせたつてもあるけれど。

「……まあ序盤の動きはそれなりだったな。これからも精進するよ
うに」

「りょーかい」

あのエヴァに素直に褒められた。

……まあ説教するだけっていうのもモチベーションは下がるしね。

「今日は知識回りをやっておくか。どうせ体は治りきってないんだ

しな」

「勉強かー……」

「高校生として勉強なんぞ面倒以外の何者でもないのである。

「知識は力を後押ししてくれる。しっかりと励むがいい」

「りょーかい……」

今日も扱かれる日になりそうだ。

「そついえば、貴様宛に手紙が来ていたぞ」

「ん？」

勉強も一段落着いた頃、エヴァがようやく思い出したというように懐から取り出した。

差出人は書いておらず、達筆な文字で果たし状と書かれている封を開け、手紙を取り出す。

ビデオのような再生ボタンや停止ボタンがあるだけで、文字は書かれていない。

とりあえず再生を押せばいいんだろうか。

そこに立体的に浮かび上がったのは見慣れた人物の姿。

『……現神無家頭首、神無秋斗より、次期神無家頭首候補、神無悠斗へ。

決闘を申し込む。お前が勝つたら――、お前が知りたいことを話す。だが、私が勝った場合、今後魔法に関わるな。

……時間は今週の土曜から日曜へと日が変わる時刻。

場所は、世界中の広場だ。

……待っている』

それは普段とはまるで違う、魔法使いとしての親父だった。

「さて、どうする？」

「そりゃ行くけどよ」

行かないだなんて選択肢はないが、決闘ねえ……。

うちの親父が一体何を考えているのかなんてさっぱり分からないが、きっと親父にとって大事なことなのだろう。

「……奴と同じ顔をしているな」

「ん？」

「期待と不安が入り混じった顔だ」

クツクツと笑うエヴァ。

何がそんなにおかしいのだろうか。

……うん？ 期待？

「そうさ、笑っているぞ？ まるで遠足を待つ子供のようにな」

「うわぁ、そんな顔してんのか。ちょっと気持ち悪いな」

「チョットドロジヤナク気持チ悪イワ」

チャチャゼロが何か行っただが無視しよう。

俺の心は硝子の様に硬く、そして脆いのだよ。

「さて、魔法使いとして2流とはいえ貴様からしてみれば厄介な相手には変わらない」

「そうだな。俺は魔法使いとしての親父のことは何も知らないし」

どんな魔法を使うのか、どういう戦闘スタイルなのか。

得意な魔法は？

距離は？

逆に苦手な魔法は？

考えるだけでもきりが無い。

「だが、幸いなことに時間だけはある」

あ、この顔は悪いこと考えてるときの顔だね。

「決闘を申し込んできた相手の家に泊まるというのもなんだろう。」

別荘なら寝泊りもできるし修行もできるし一石二鳥だね」

「……監禁じゃねーか!？」

「軟禁の方が意味合い的には近いと思います」

いや、そんな訂正はいいから。

「とはいえ劇的に強くなるような方法などない。基礎訓練の密度を

上げるだけだ」

「ういつす」

基礎訓練かー。

魔法の矢の本数増やしたり、障壁展開時間を延ばしたり。こっちが倒れるまで続けるし、中々きついんだよな。

「ソレト今マデ以上ノ実戦訓練ダナ。ケケケ」

「お手柔らかに頼むわ……」

これ以上やられるとそのうち俺の体が継ぎ接ぎみたいになってしまいそうで怖いんだ。

俺のためにやってってくれているとはいえ、死にそうになるのはやりすぎなんじゃないかなーと思ったり。

遠い眼をしながらそんなことを考えているとエヴァが覗き込むように顔を近づけていた。

「負けるなよ？」

一瞬何を言われているのか分からなかった。

どうにもエヴァが素直に言うことなんて少ないから反応が遅れてしまう。

「負けないさ」

魔法も面白いし、友人も出来たし、なによりも親父の態度が気に食わん。

あの親父をぶん殴って知ってること吐かせて、それから――。

どうでしょうか？

……別にどうでもいいか。

今俺が困るのは魔法に関わることを禁止されることだし。

親父と変なわだかまりがあっても嫌なだけだしなあ。

ふと、右手に随分と力が入っていた。

ツメで押されていたところが内出血したようになっていた。

認識した途端に鈍い痛みが主張し始めた。

こんなになるまで気付かないとは。

どうにも親父のことを意識しすぎていたらしい。

「……勝つさ」

誰に宣言するともなく、呟く。

この決闘に命のやり取りなんてものはないだろうが、大事なものが掛かっていると言ってもいい。

勝てる勝てないじゃなく、勝たなきゃいけないのだ。

……ちよつと熱血すぎるな。

俺はもうちよつとだらーつとした感じで丁度良いわな。

止めだ止め。とりあえず親父をぶん殴ることだけに集中しておこつ。

「さて、休憩は十分すぎるほどにとつたな？」

重たいを音を立てて目の前に重なる本の山。

……。

「茶々丸さん！ 君のご主人様に、俺は旅に出たと伝えてくれ！」

「遅い」

叫び、走り出した俺の足に何かが絡みつき引っ張られる。

全力で走りだしていた俺は当然のごとくバランスを崩してすっ転び、そのまま残る手足も押さえつけられる。

「ふんぬっ！」

「そーら、頑張って見せろ」

力を込めても、魔力で身体強化してもまるで起き上がれない。
どういうことだよ!?

いくらなんでも強化した力で無強化のエヴァに、しかも触れられもせず負けるとかありえん……っ！

落ち着け、まず考えろ。

エヴァはどうやって俺を拘束している？

自由な頭を動かして何かが巻き付けられている右腕を見る。

「糸……!?!」

「人形遣いの技能^{スキル}さ。魔力があれば周囲3km300体の人形を操れるぞ」

相変わらず反則臭いスキルを持ってやがるな、コイツは!?!
最強とか言われるわけだよ。

1人で軍隊持つてるようなものだもんな。
それ行くぞーと攻めて行ったら軍隊持ちでした、だなんて笑えるか
つての。

「てい」

とりあえず縛られたままというのはエヴァに何を言われるかわからないので小さな風の刃を作って糸を切る。

飛び起き、距離を離し、向かい合って構える。

「そこそこ動けるな。なら少し手合わせをしてやろう」

言うや否や、指を躍らせ糸を自在に操る。

こっちの体調が万全でないからか、攻撃頻度は低い。

それにしても視認しにくくてやりづらいつたらありやしない。

少しでも糸に引っかかればそのまま絡み取られ、外している一瞬の間に脚を取られてすっ転ばされる。

「こんなところか」

どれほど空を見上げただろうか。

人工の空が茜色に染まり、見上げた数えるのも億劫おっくうになった頃、ようやく終了の声が聞こえた。

雁字搦めにされていた体が開放され、大きく息を吐いた。

「私に触れることもできないとは」

「てめえのその全距離対応できる知識と経験と技術を省みてから言え」

糸から逃げようと後ろへ下がれば魔法が飛び、糸を潜り抜ければ合気道ですっ飛ばされる。

理不尽すぎる強さだ。

「技能で敵を圧倒できるという見本にはなったか？」

「十分すぎるわチクショウ」

悪態を吐くとそれはよかったと満足気に笑われた。
大の字に寝たまま笑い声を聞く。

「私ほどになれば魔法の矢を斉射すれば大抵の奴は相手にならん」
だろうな。

1本1本がそれほどでもない魔法の矢も、エヴァが持つ本来の魔力で1000、2000と出したらそれだけで高位魔法と同じくらいの威力があると言っていた。

「だが勿論、貴様に同じことが出来るわけがない」

魔力容量も制御も並な俺に同じことをやれと言われても暴走させるか、ぶっ倒れるかということだろう。

「さつきはああ言ったが技術、技能も一朝一夕で身につく様なものではない」

エヴァの糸を操る技術も、合気道も長い年月を経て昇華されたものだということも分かる。

高々3ヶ月程度、魔法の基礎と体の動かし方を学んだ程度では絶対に辿り着けない場所。

「貴様は、何を自分の武器として奴と戦う？」

眼に見えて分かる力も無い、経験や知識、技術も足りていない。
そんな俺が、魔力はともかく経験や知識、技術があるであろう親父

に何を以って対抗するか。
決まってる。

「近付いて、ぶん殴る」

上半身だけ起こして自信満々に答える。

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、これほどとは……」

俺の答えを聞いて言葉だけは呆れかえるエヴァ。^{あき}

だがその言葉に込められた感情は呆れではないことは確かだ。
いいんだよ、これで。

実際エヴァにリベンジした時だってそれしか方法は無かったわけだし。

そこに至るまでの過程が違っただけで俺がやることは前と変わらない。

「馬鹿は馬鹿なりについてことだよ」

「何モ考エテナイダケジャーノ力？」

ケケケと笑うチャチャゼロの言葉は無視する。

……半分からいは凶星であることは心にしまっておこう。
暗くなり始めた空を見上げる。

——神無秋斗との決闘は、3日後。

11 時間目 親子の死闘

空には薄くだが雲がかかり日が差さず、重苦しい雰囲気が漂っている。

室内に響くのは壁に掛けられた時計の音と部屋の主がペンを走らせる音だけである。

「失礼します」

ギィ、と重く扉が開き静かな声が発せられた。

「おお、しずなくん」

「学園長宛に京都の方から書類が送られてきてました」

「うむ、ありがとう」

部屋の主――近衛近衛門――は封筒を受け取り一礼したしずなが部屋を出るのを確認してからそれを開ける。

封筒の中身は近衛門が彼の娘婿に頼んだ報告書。

「ふむ、彼は婿殿が保護していたのか」

「彼、とは？」

突然向かいから返事があった。

どうやら書類を見るのに夢中になっていたらしい。

「おお、高畑君。いたのかね？」

「いるはずなのにノックをしても声をかけても返事が無いから入りましたよ。人払いなどありませんでしたし」

溜息混じりに高畑が言う。

しかしすぐに姿勢を正し本題へと入る。

「エヴァと神無さんが接触したそうです。どうします？」

「ふむ、そうか。動き出したかね。ワシが思っていたよりも随分と早かったのう」

闇の福音と神無家頭首の接触。

それは以前この部屋であったことを思えば良い事でないのは分かりきったことである。

「なにもせんよ。彼ら自身の問題じゃ」

だというのに学園長は関与しないと言う。

「それに、下手に突ついてエヴァの機嫌を損ねることもなからう」

近衛門の言うことももつともである。

呪いと学園結界での封印があるとはいえ、エヴァンジェリンを怒らせたなら学園の魔法使いが束になっても敵^{かな}わないだろう。

その封印されている筈の魔力もここ最近になって少しずつ戻ってきている。

恐らく神無悠斗が関係しているのだろうが詳細は分からず、といっ

たところである。

「嫌な天気ですね」

高畑が窓から空を見上げて呟く。

つい先ほどまでは日を遮るだけ程度だった雲は厚みを増して暗い色
を落とし始めた。

「なあに、それでもいつかは晴れるものじゃ」

3日。

短いようで長かった。

というか別荘に通っているせいで本当に長かった。
修行漬けの日々もこれで終わる。

……結果がどうであれ。

「……来たか」

「ああ、来たさ」

昼間は憩いの場として人気のある世界樹の広場だが、今の時間――
日付が変わる5分前といったところか――になると流石に閑散とし
ている。

街灯に照らされている男のもとへ普段通りに歩いて向かい、数歩分離れたところで対峙する。

伏せていた眼をゆっくりと開き、確かめるように目の前の羽織を着た男——神無秋斗——が声を発した。

「私——、いや。俺も一応は魔法使いの端くれなんだな。全力で行かせてもらう」

懐から2枚の札を取り出して口元に持ってゆき呟く。
放り投げ、音と煙を立てて現れたのは1体の鬼と1匹の犬。

「む？ おい、秋斗よ。久々に呼び出されたと思ったら相手は童ではないか」

「交戦した形跡もないな。それほどの相手か？」

おおお、犬のほうも喋るのか。

犬って言っても狼に近いだろうし、成人男性くらいの大きさはあるけれど。

「あれは俺の息子だよ。なに、殺す気でやってくれ」

「……ク、クカカカカカ！　そうか息子か！　時の流れというのは早いものだな！」

鬼が嗤う。

「しかし殺す気ではな。童よ、命を粗末に扱うものではないぞ？」
犬が吼える。

「任せろ。その馬鹿親父をぶん殴るためにここにいるだけだから。死ぬつもりなんぞ毛頭ない」

俺は、笑う。

魔力供給は済ませてある。

さあ、御託なんぞどうでもいい。

「とつとと始めようじゃねえか！」

「威勢が良いだけでは何も出来ぬぞ、小僧！」

一角鬼の手持ちは長剣。

これなら前回戦った鬼たちも持っている奴がいたので比較的対処がしやすい。

横薙ぎに合わせて体を沈め、斬り返しの腕を掴んで止める。

離れる前に手首を捻り強引に引き寄せ肘打を入れるが一瞬早くガードされた。

投げようと脚を払うがそれも防がれる。

足元に集中したのが災いしてあっさりと掴んでいた腕を振りほどかれ、気で強化された体が自由になった。

破裂音が鳴る。

耳で聞こえたのは3回だったが、身に受けた衝撃は倍ほどだったろうか。

神速。

そう言ってもいいほどの連撃が魔力障壁を叩き、打ち鳴らしたのである。

（何も見えなかった……！）

いや、何も見えなかったというわけではない。

気で強化された体の光り輝く軌跡の残滓は見えた。

だがそれが分かったところで今この場で何の役に立つというのか。心の中で悪態を吐き、思考を巡らせる。

幸い障壁は貫通されなかったし、さきほどの連撃だけを打ち続けることなどできないだろう。

これなら――

「勝てぬ相手ではない、などと思っているのか童よ！」

こちらへ一直線に疾走する大きな影が音を漏らした。

後ろ、横……いや、上だっ……！！

足元を黒い暴風が通り過ぎる。

「土生金・山荒！」

ほっとしたのも束の間、聞き慣れた声が地面を打ち付ける音と共に聞こえた。

真下の石畳から巨大な棘が一直線にこちらへ向かってくるイメージ。かくしてそれは、鋭い姿を地中から現してイメージ通りにこの身に襲い掛かってきた。

風の魔法で少しだけ体をずらして回避し、棘の側面を蹴って親父に向かう。

ポケットからエヴァからもらった練習用の杖を取り出して魔力を込める。

魔法の矢、火の1矢。

「っらぁ！」

こちらの拳が当たる前に親父は懐から札を取り出し障壁を張った。

拮抗は一瞬、こちらが弾き返された。

着地のわずかな硬直は見逃してもらえず、鬼の剣が猛威を振るう。鬼と親父に挟まれ、外から犬が今か今かと前足に体重を乗せてこちらの隙を窺っている。

これはマズイ、が、逆にチャンスでもある。

「火精召喚、戦乙女よ、妨害頼んだ！」

詠唱と同時に親父へと駆ける。

現れた4体の火精は2体ずつ鬼と犬に向かう。

「炎天、燃えよ！」

「水盾！」

放たれた札は炎に包まれて真っ赤な華を咲かせる。

それに対して魔法で出した水を前面に展開して炎の勢いを弱め、終には札の燃え滓が宙を舞う。

そのまま走り抜けようとして——視界の端で燃え滓が新たな魔力光を放っているのが見えた。

「火生土・大柱！」

「風花風障壁！」

脚は止めず10tのトラックの衝突も止めうる風の障壁を作り出し、灰から生み出された直径が俺の背ほどもあるそれを一瞬だけ受け止め後ろに逸らす。

「火の1矢！」

距離を取ろうとしている親父に1発。嫌がらせ程度にはなるだろう。脚を踏み出し着地する瞬間に横腹に衝撃。

普通では考えられないほどに吹き飛んで地面を転がった。

何かと思っただけなら仰向けの俺の上に丁度覆いかぶさるような状態で犬がいた。

喉元に噛み付こうとするので慌てて腕でずらしてガードする。

目の前でガチリと牙が噛み合わさった。

くそっ、精霊がやられたのか戦わずにこっちに向かってきたのかは分からんけど早すぎる。

「邪魔だ、どけえっ!!」

押すように腹を蹴り上げて巨体を浮かし、横へ転がって抜け出す。

ポケットに手をつ込み目当てのものを1つ取り出して犬の口に放り込む。

切り札その1!

「爆ぜろっ!」

内包された魔力の炎が輝きをもって爆発し、犬のその大きな体躯を内側から蹂躪する。

「狼鬼!? くっ、角鬼!」

「分かっている!」

親父が札を犬に放つが体が光へと変わっていくのを止めることはなかった。

犬が魔力へと還るのを横目に目標を角を持つ鬼へと変え、次の一手

を考える。

出し惜しみなどしないほうがいいだろう。

間合いを詰めてきてはいるが、先程の犬にしたことを警戒してか直線軌道ではなくジグザグと走ってくる。

鬼の決め手はあの神速の連撃だろう。隙を見せれば撃ってくる筈。

「風の精霊さん、捕まえてくださいな！ 風の3矢！」

バックステップで距離を取りながら大きく声を上げて詠唱し右腕を振りかぶって矢を放つ。

「遅い！」

それまで狙いをつけさせないような挙動をしていた鬼が一息にこちらの懐へと飛び込んでくる。

放った矢へと向けていた欠片ほどの意識を完全に戻して鬼を見る。

右の腰溜めから放たれようとしているのは恐らくあの技。

着地もままならないこの状況で何の抵抗もなく喰らうのは敗北と同意だと言えるだろう。

鬼の手元が霞む。

それに対して、未だ地面に着かぬ筈の脚で踏ん張り自ら前方へと飛び出す。

「なっ！？」

「風よおっ！」

狙いは剣を振るう直前、未だ加速もしていない手元。

風の塊を押し付けるようにしてその身の動きを阻害する。

そもそもって、切り札その2！

「開放、収束・火の17矢！」

左腕に座している降魔の腕輪の魔力を開放し、今の実力以上の魔法を即座に発動させる。

焼け付く魔力を拳に乗せて、踏み込み、放つ！

がら空きの胴へ向けて撃ち出した拳は魔力障壁——恐らく親父が張ったもの——に阻まれるが、それも一瞬。

拳が腹へと突き刺さり、纏った焰が容赦なく身を焦がす。

衝撃で鬼は吹き飛び地面へ叩きつけられる前に魔力へと還っていった。

ザア、と風に吹かれ世界樹の葉が啼くようにざわめいた。

「捕縛の魔法の矢は囷、か」

「まあ、真正面から撃って当たる奴なんぞいないだろ」

術師のタイプじゃないならどうしても距離を詰める必要がある。

隙を見せれば接近してくるだろうと思い、バックステップのときに着地点あたりの地面を少しだけ盛り上げておいた。

見事にはまって普通ならありえないタイミングで地を蹴ることが出来て、相手の虚を突けた、と。

「で、親父1人だが？」

「……来たれ」
アテアット

親父はバサリ、と上に着ていた羽織から腕を抜いて地に垂らし、腰に挿していた札の5枚を手に取り放り投げると、ちょうど親父を中心に5角形を形作るように地に落ちた。

いつの間にか親父の背に隠れるように大きな丸鏡が浮いていた。
アーティファクトか。

「五行昇華陣、展開」

落ちた札を頂点として星と円の陣が描かれる。

親父らしからぬ魔力が陣から湧き溢れ、視界が極彩色の魔力に染ま
っていく。

『それ天地いまだ分かれざりし時、混沌として、まるがれる雉子の
ごとし』

「……っ、砂の矢！」

呆けている場合ではない。

散弾のようにぶちまけられた砂利は、しかし親父には届かずに極彩
色の魔力の奔流に飲まれていった。

くそっ、威力がまるで足りない。

「光の精霊11柱！」

ありったけの魔力を注ぎ込んで詠唱。

早く早く早くっ！

「魔法の射手、収束・光の11矢！」

頼む、貫け……！

そんな願いも空しく、変わらずに、いや先程よりも勢いを増してい
る魔力に飲まれて消えていった。

エヴァの話じゃ親父の魔力は俺よりも少ないはずだっけのに、ただ

の魔力の噴出に全力の魔法の矢が防がれるってのは一体どうい
とだよ。

額から流れる汗を乱暴に拭って一呼吸。

息を落ち着けながら無詠唱でゆっくりと氷属性の魔法の矢を出して
待機させる。

無詠唱で出せる数はまだ少なく、最大で5本。

さて、どうする？

眼を逸らさずに親父の動向を見ていると、突然極彩色の魔力が5色
に分かれた。

『火狼刀』 『土竜槍』 『金鷹鎌』 『水鮫矢』 『木蛇鞭』

分かれた色から炎が、土が、鉄が、水が、木が、まるでそれ自体
が生命を持ったように襲い掛かってくる。

脚を止めるな、動け！

後ろへ跳びながらあらかじめ出しておいた魔法の矢を、迫る魔法を
阻むように放つ。

魔法、つまりは魔力で形が作られているんだから……！

「来たれ氷精、爆ぜよ風精！」

魔法を当ててやれば消えないにしたって威力は落ちる筈！

宝石を取り出して魔力を増幅^{ブースト}させる。

「氷爆！」

青い光が中空に生まれ収束し、冷気を伴った中規模の爆発を起
す。

エヴァほどまでは言わないがそれでも今出せる全力の氷爆である。
冷気と爆風に晒された魔法体は、それでもなおこちらに向かって突

進してくる。

だがやはりダメージはあるらしく、動きが先程よりも遅い。これならいける、と突っ込もうとしたところで頭の中で何かが警鐘を鳴らした。

前にかけていた体重を無理矢理横へ移して転がるようにその場を跳び退く。

先程までいた地面から土の槍が獲物を串刺すように地表へと現れていた。

「魔法の射手・風の3矢！」

魔法の矢が当たる前に土の槍は地面へと引っ込んでいった。あつぶね、あのまま行ったら下手すると死んでたわ。

「っ！ 氷盾！」

横からの熱に驚き咄嗟に出した盾だが、マズイ。

盾とは別に魔法障壁を展開、魔力を注ぐ。

案の定氷の盾はみるみる溶かされ、鉄の刃が魔法障壁すらも紙のように切り裂き俺の体を傷つけた。

奥歯を噛み締めて痛みに耐えるが、それと同時に静かな衝撃が2つ。左肩と右太腿に。

水の矢……！

気付いたときにはもう遅い。

焼ける様な痛みが傷から広がっていく。

毒のようにジワリジワリと体が侵されてゆく恐怖。
しな
撓り迫る鞭。

脚を動かそうとしても石のように固まって動けない。

「チッ！ 風花風障壁！」

連続使用は不可能なこの魔法だが、物理的な衝撃にはめっぽう強い
ためどうしても頼りがちになる。

そして、防いだという一瞬の気の緩み。

それは戦場においては致命的な隙。

上空から飛来した刃に脚を深く斬られ膝を着く。

焼け付く刀に袈裟に斬られゆっくりと倒れた。

痛みなど通り越し、感じられるのは胸から溢れていく血^{いのち}だけだ。

視界が暗くなっていく。

治癒魔法を唱えるが、あまり効果が感じられない。

負け、か。

「……俺の勝ちだな」

親父の言葉が酷く頭にきた。

言葉が、というよりは声の調子に。

諦念、後悔、罪悪感、苦しみ、そして空虚。

負けられない。

ザリ、と指先が地面を搔くのが分かった。

まだ動ける。

胸を押さえ治癒の魔法を使いながらゆっくりと立ち上がる。

ふらついたが、まだ大丈夫。

魔力も少なくなってきたが、大丈夫。

咳きこんだ拍子に赤い何かと一緒に出てるけど、まだいける。

あの馬鹿野郎を見据えて。

「……どうしたよ。まだ、負けてないぜ？」

『……太極・神成』

息も絶え絶え、満身創痍。1度地に倒れ伏したがそれでも負けを認めるつもりなんてない。

それを見て何を思ったのかは知らないが、親父が手を打ち鳴らすと分かれていた魔力が1つに戻り右手に集まり球となる。

意を決したようにそれを握り潰す。

と、親父の右腕が指先から変容していく。

いや、変容は右腕だけに留まらず肩や顔などにも及んでいる。

もともと極彩色の魔力とは思えないほどに神聖な純白。

ところどころに刺青のような紋様と羽のようなものが付いている。

「グ、あ、あガ」

苦悶の声。

親父の体があ魔法に耐え切れていないのだろう。

歯を食いしばり、眼を血ばらせて襲い掛かる苦痛に耐えている。

「お、おオ、オオオおお緒おオ尾御オオオおオオ！！」

「つたく、馬鹿親父が……」

ポケットの中身と腕輪の魔力を確認。

一撃で沈めないと俺も親父も危ないだろう。

治癒に使っていた魔力を止める。

「来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪！」

今のところエヴァに教えてもらった中で一番威力の高い魔法だ。これで倒せなかったら俺の負け。至って単純な^{シンプル}ものだ。

「全力で、増幅^{ブースト}お！」

アーティファクト

宝石と腕輪の魔力をすべて魔法に注ぎこむ。

もっと強く……。

もっと鋭く……！

まだ足りない。

俺の魔力全部持つていけ！

「闇のおっ！」

拳の先に強烈な冷氣と暗闇が球体となって現れる。

「おおおおおおっ！！！」

親父は叫びながら真正面から突っ込んでくる。

上等！

あんな死んだような顔をしてた馬鹿野郎に、負けて、たまるか！

「吹雪っ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071n/>

魔法先生ネギま！～とある生徒の奮闘記～

2011年12月3日18時45分発行